

# 奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和57年度

昭和58年

奈良市教育委員会

# 奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和57年度

## 序 文

奈良市教育委員会が、平城京での主体的な発掘調査を開始して四年目になりますが、現在では殆んど切れ目なく発掘している状態になってきております。周知の遺跡での発掘届出件数も昭和54年度には123件であったのが、今年度は261件とちょうど倍増しています。発掘調査にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県、大和郡山市、奈良市の四者が協議して実施しておりますが、件数の急増のためその対策に苦慮しているのが実情です。

昭和57年度の調査のうちまとまった成果を得た東市跡と水道局庁舎建設予定地の調査報告については別冊として刊行し、その他のものをここに一括して報告いたしました。したがって集録した報告は比較的小規模なものが多くなっておりますが、左京五条五坊五坪のように平城京造営以前の建物跡が確認できた例もあり、一定の成果を得ております。今後とも調査体制の充実をはかってまいる所存であります。

発掘調査にあたって、日頃御指導、御協力をいただいております奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめ関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和 58 年 3 月

奈良市教育委員会

教育長 藤 井 宗 治

## 例 言

1. 本書は、昭和 57 年度に奈良市教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告を集録したものである。

なお、昭和57年度には、本書に収録した調査以外にも、平城京左京八条三坊十一坪（東市跡推定地）および平城京左京二条二坊十二坪において発掘調査を行なっているが、両調査については別途に概報を刊行する予定である。

1. 本書に集録した報告は、次頁の目次に記したとおりである。なお調査地の位置は、折り込みの発掘調査地位置図に示している。
1. 本書の執筆は、調査担当者が分担して行ない、各報告の末尾にその文責を明らかにした。全体のとりまとめについては、中井 公がこれにあたった。

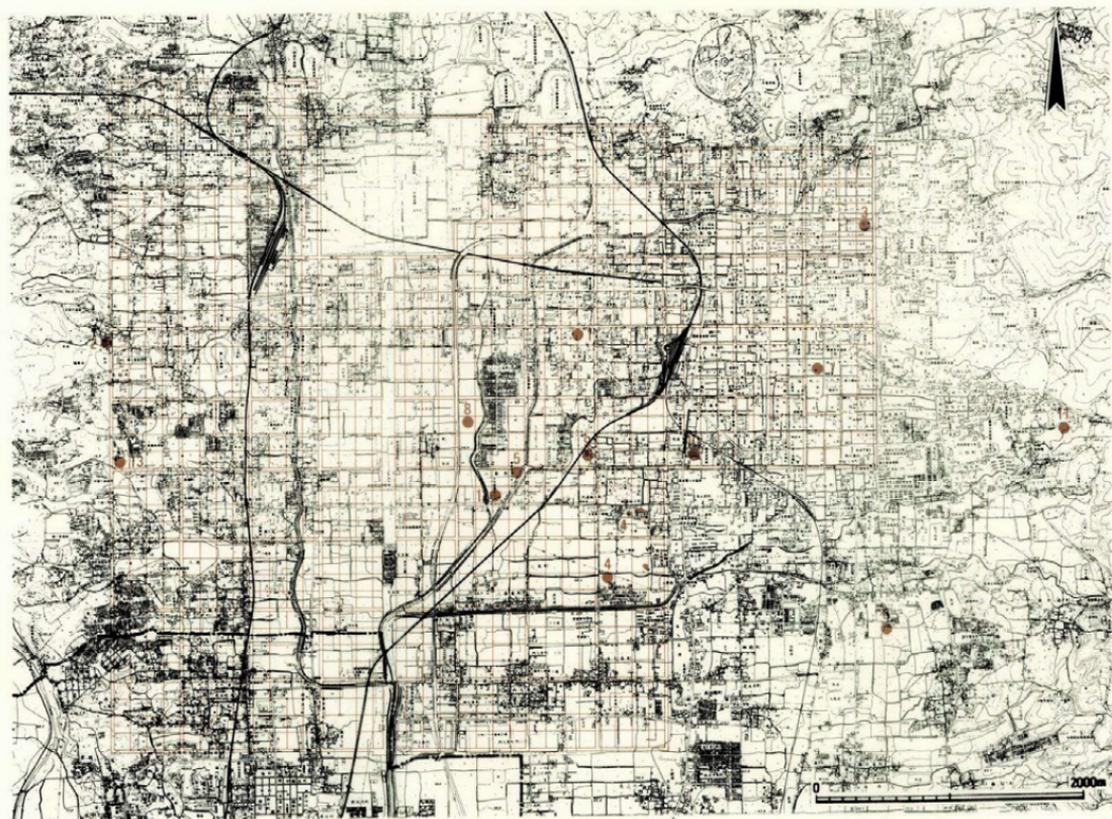
# 目 次

1. 平城京左京四条三坊九・十六坪の調査	1
2. 平城京右京四条四坊十六坪（西四坊大路）の調査	2
3. 平城京左京二条七坊十四坪の調査	4
4. 平城京左京七条四坊三坪の調査	6
5. 平城京左京六条二坊十六坪（五条大路）の調査	7
6. 古市町内遺物散布地の調査	7
7. 元興寺食堂跡推定地の調査	8
8. 平城京左京五条二坊二坪の調査	12
9. 平城京左京五条三坊十三坪の調査	14
10. 平城京左京五条五坊五坪の調査	16
11. 高畑町内遺物散布地の調査	18
12. 平城京左京六条二坊十坪（東二坊坊間路）の調査	20
13. 平城京右京五条四坊十三坪の調査	20
14. 史跡大安寺旧境内の調査	21
82-1 次調査	22
82-2 次調査	22
82-3 次調査	22
82-4 次調査	23
82-5 次調査	24
82-6 次調査	24

## 調 査 地 一 覧

	調 査 地	調 査 期 間	調 査 積	
1	平城京左京四条三坊九・ 十六坪	三条添川町131番地の1	57年3月8日～3月18日	100㎡
2	平城京右京四条四坊十六坪	宝来町271～276番地他	57年6月15日～7月28日	919㎡
3	平城京左京二条七坊十四坪	押上町41番地	57年7月16日～8月3日	146㎡
4	平城京左京七条四坊三坪	東九条町谷1175番地の2他	57年6月1日～6月9日	42㎡
5	平城京左京六条二坊十六坪	大安寺西1丁目281番地	57年8月23日～9月8日	275㎡
6	古市町内遺物散布地	古市町1263番地	57年8月21日～8月27日	140㎡
7	元興寺食堂跡推定地	北室町18～22番地他	57年12月6日～1月31日 58年	260㎡
8	平城京左京五条二坊二坪	大安寺町出袋531番地の3他	57年12月20日～1月17日 58年	450㎡
9	平城京左京五条三坊十三坪	大安寺町142番地の1	58年1月19日～2月10日	210㎡
10	平城京左京五条五坊五坪	西木辻町67番地	58年2月1日～3月3日	438㎡
11	高畑町内遺物散布地	高畑町1476番地他	58年3月10日～3月31日	1020㎡
12	平城京左京六条二坊十坪	大安寺西2丁目208番地	57年12月20日～12月25日	64㎡
13	平城京右京五条四坊十三坪	五条町西山995番地の1	58年2月21日～2月24日	85㎡
14	史跡大安寺旧境内 (82-1次)	大安寺町東護麻堂1161番地の4	57年6月7日～6月12日	19㎡
	同 (82-2次)	大安寺町ヒラキ1161番地の1	57年10月1日～10月6日	18㎡
	同 (82-3次)	大安寺町1125番地	58年2月14日	4㎡
	同 (82-4次)	大安寺町1147番地	58年2月15日～2月16日	9㎡
	同 (82-5次)	東九条町1412番地の1	58年3月8日～3月10日	45㎡
	同 (82-6次)	大安寺町ヒラキ1265番地の4	58年3月16日～8月23日	40㎡
	平城京左京八条三坊十一坪	東九条町441番地の1	57年4月20日～8月7日	240㎡
	平城京左京八条三坊十一坪	東九条町493番地の1他	57年5月19日～6月24日	125㎡
	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町261番地の1他	57年5月1日～12月18日	1800㎡

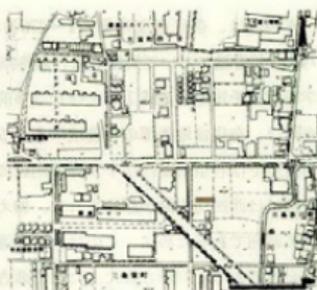
※ 掲載番号は、発掘調査地位置図に対応する。



免振調査地位位置図

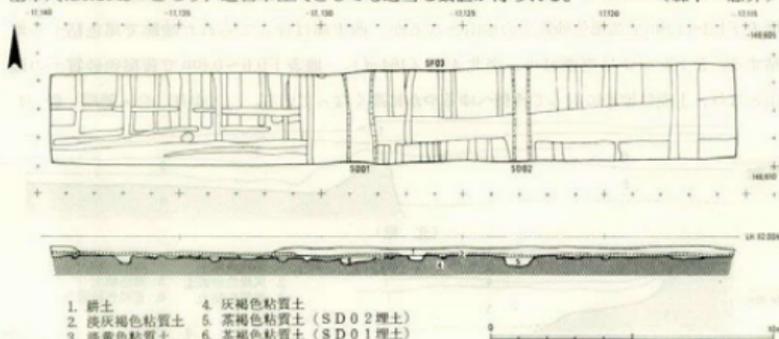
# 1. 平城京左京四条三坊九・十六坪の調査

本調査は、奈良市三条添川町131番地の1において行った、店舗新築にともなう事前調査である。調査地は平城京三条大路を踏襲する三条通南側の水田で、平城京の条坊では左京四条三坊九坪と十六坪の坪境に相当し、小路の存在が推定される位置である。このため、調査は小路の確認を目的として東西25m、南北4mの発掘区（面積100㎡）を設定した。調査は昭和57年3月8日から18日にかけて実施した。



発掘区の位置 1/7500

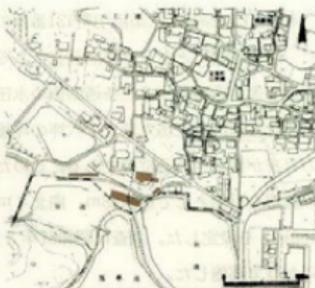
発掘区の土層は、耕土、床土の下、淡灰褐色粘質土が全面に広がり、その下、灰褐色粘質土および淡黄色粘質土上面において遺構を検出した。検出した遺構は、水田の耕作に伴うものと思われる素掘り溝がほとんどであるが、南北に走る溝SD01、SD02からは、奈良時代の瓦、土器が出土しており、小路の東西両側溝と考えられる。SD01は幅約80cm、深さ約20cm、SD02は幅約50cm、深さ30cmで、溝心々間の距離は5.7mを測る。両溝の間は小路路面SF03と推定でき九坪と十六坪との坪境小路と考えられる。なお今少し詳細な検討を加えるならば、この小路心は、平城宮朱雀門心より国土方眼位を介して東へ1460.47mの位置にある。南北条坊の振れ、ここでは、朱雀大路が国土方眼に対して北で15'41"西偏することを考慮し、修正を加えると、両者の心々距離は1457.939mとなる。平城宮朱雀門心から左京四条三坊九坪と十六坪との坪境小路心までの造営計画距離は、4950尺（2坊幅+3坪幅）であり、基準尺は0.2945mとなり、造営単位尺としても適当な数値が得られる。（森下 恵介）



検出遺構平面図・北壁堆積土層図 1/200

## 2. 平城京右京四条四坊十六坪（西四坊大路）の調査

本調査は、奈良市宝来町271～276番地および平松町740、743番地において実施した、仮称奈良市立伏見南小学校建設予定地の造成工事に伴う事前調査である。調査地は、奈良盆地西部の丘陵地にあたるが、平城京の条坊復原では右京四条四坊十六坪の西辺にあたり、調査地東端には西四坊大路が想定された。加えて、造成予定地が広範囲であるために、このほかにも遺構の有無の確認が必要であると判断された。ただ、調査地の大部分が谷地形を利用した溜池で占められていたために、トレンチ

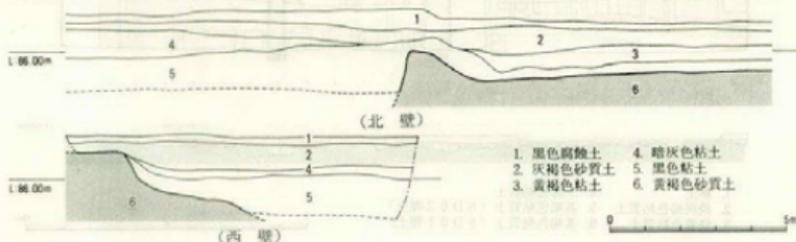


発掘区の位置 1/7500

を設定し得たのはわずかな空閑地に限られた。調査は昭和57年6月15日に開始し、7月28日にその全日程を終えたが、この間に4箇所のトレンチを設け919㎡の範囲を発掘した。

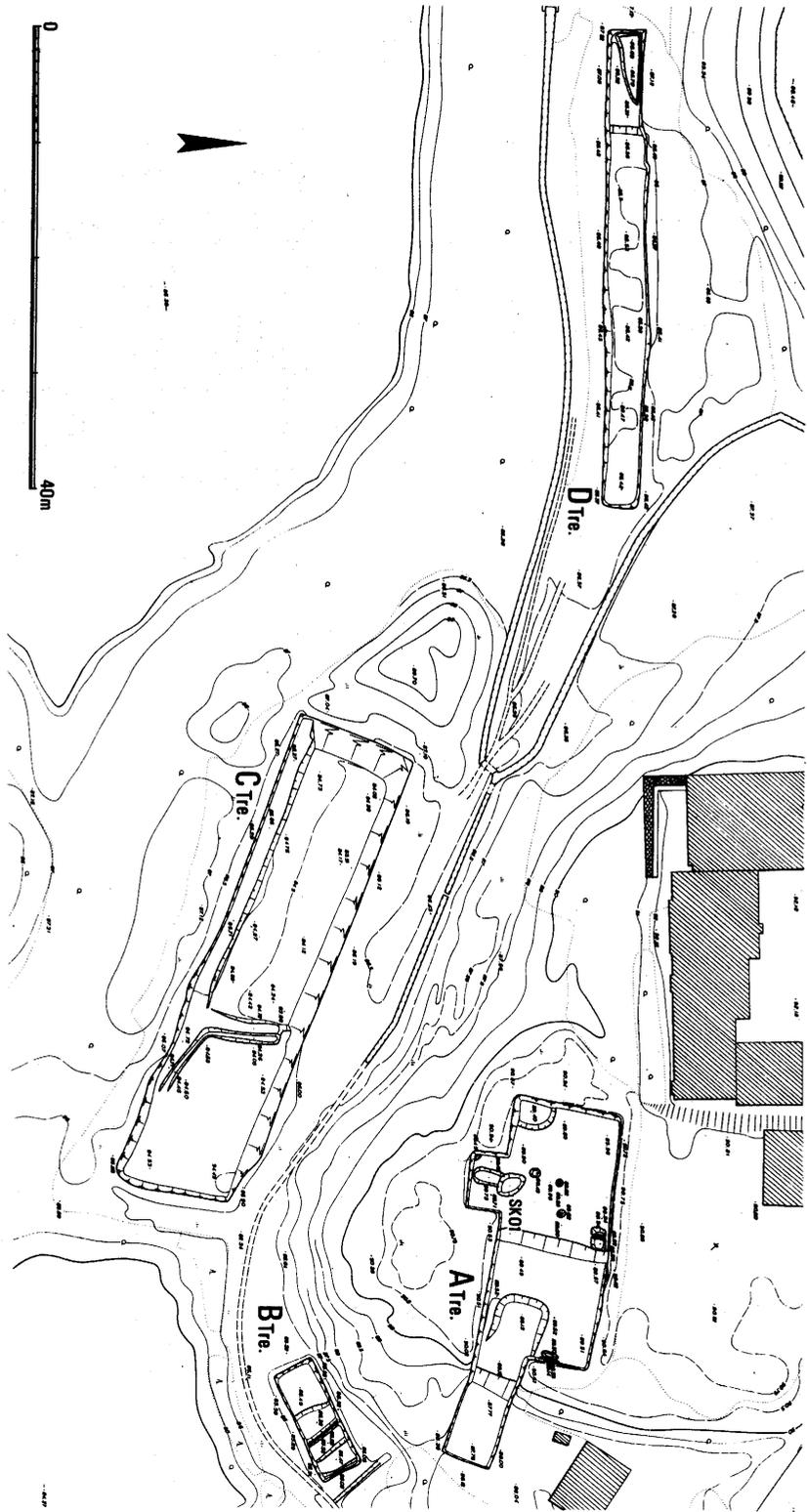
調査の結果、いずれのトレンチにおいても顕著な遺構は検出できず、西四坊大路についても何らその手懸りを得ることが出来なかった。以下、各トレンチについて概略を記しておく。

Aトレンチは、調査地北端で北西から南東にのびる舌状の小支丘上に設定した。面積285㎡。0.8～1.0mの客土があり、これを排除すると黄褐色砂質土の地山が現われるが、南壁近くで長さ2.8m 短径1.8mの平面楕円状の土塊を検出した。茶褐色の粘質土が堆積し、わずかに奈良時代の土師器と土馬の小片が出土した。B～Dの各トレンチは、Aトレンチを設定した小支丘の南裾部に配した。Bトレンチは、東西10m、南北4m（40㎡）。地表下30cmで黄褐色土の地山となるが、根切り溝数条がみられたにすぎない。Cトレンチは、東西43m、南北10m（430㎡）。地表下1.2～1.6mで黄褐色砂質土の地山となるが、西半部は埋立てられた池跡で黒色粘土が堆積する。Dトレンチは東西41m、南北4m（164㎡）。地表下0.6～0.8mで黄褐色砂質土の地山となり、上面は地形に沿って西側へゆるやかに高くなっている。（中井 公・藤原 豊一）



Bトレンチ北壁・西壁堆積土層図 1/160

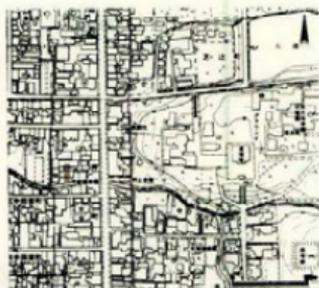
調査トレンチ配置図



### 3. 平城京左京二条七坊十四坪の調査

#### I はじめに

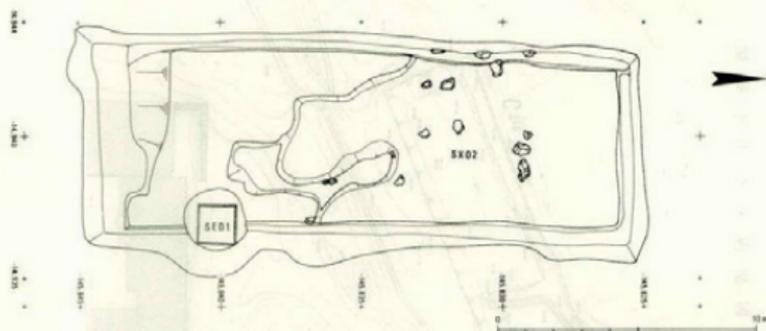
本調査は、奈良市押上町41番地において実施した、観  
 光館建設工事に伴う事前調査である。調査地は、平  
 成京の条坊復原では左京二条七坊十四坪のほぼ中央部  
 にあたる。調査は、東西7.6m、南北19.2m（146㎡）  
 の発掘区を設定して行ない、調査の期間は、昭和57年7  
 月16日から8月6日までである。



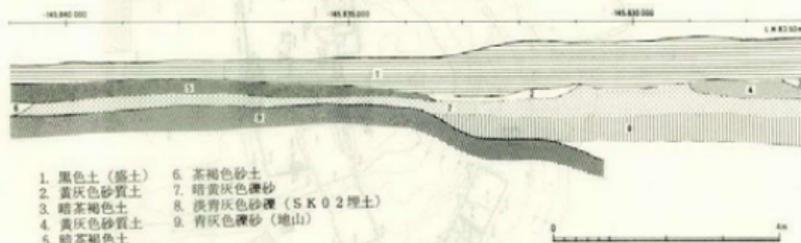
発掘区的位置 1/7500

#### II 検出遺構

調査地は既に造成されており、地表下0.6~1.2mま  
 ではその折の盛土である。以下、黄褐色砂質土、暗黄灰色の礫砂などが0.5~0.6mの厚さで堆  
 積し、地山の青灰色礫砂に至っている。検出した主な遺構は、井戸1基、土塼1である。



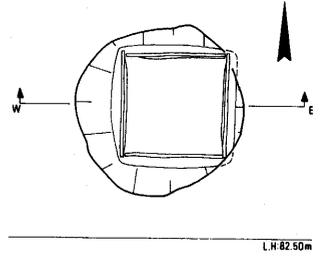
検出遺構平面図 1/200



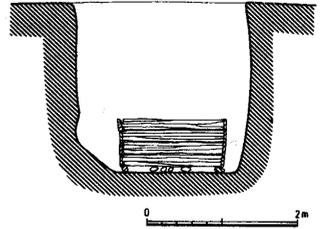
- |            |                   |
|------------|-------------------|
| 1. 黒色土（盛土） | 6. 茶褐色砂土          |
| 2. 黄灰色砂質土  | 7. 暗黄灰色礫砂         |
| 3. 暗茶褐色土   | 8. 淡青灰色砂礫（SK02埋土） |
| 4. 黄灰色砂質土  | 9. 青灰色礫砂（地山）      |
| 5. 暗茶褐色土   |                   |

西壁堆積土層図 1/100

S E01 発掘区の東南隅で検出。径約2.2mの円形掘形をもち、検出面からの深さ2.3mを測る。掘形の中央やや北東寄りに、内法1.34mの井籠組の井戸枠が据えられており、四段分が遺存していた。枠材は、両端を凹形に削ったものと、凸形に造り出したものとで組合わせの仕口としている。寸法は、幅14cm、長さ1.4mで、厚さ3cm内外を測る。枠内からは13世紀後半の土師器皿が出土した。

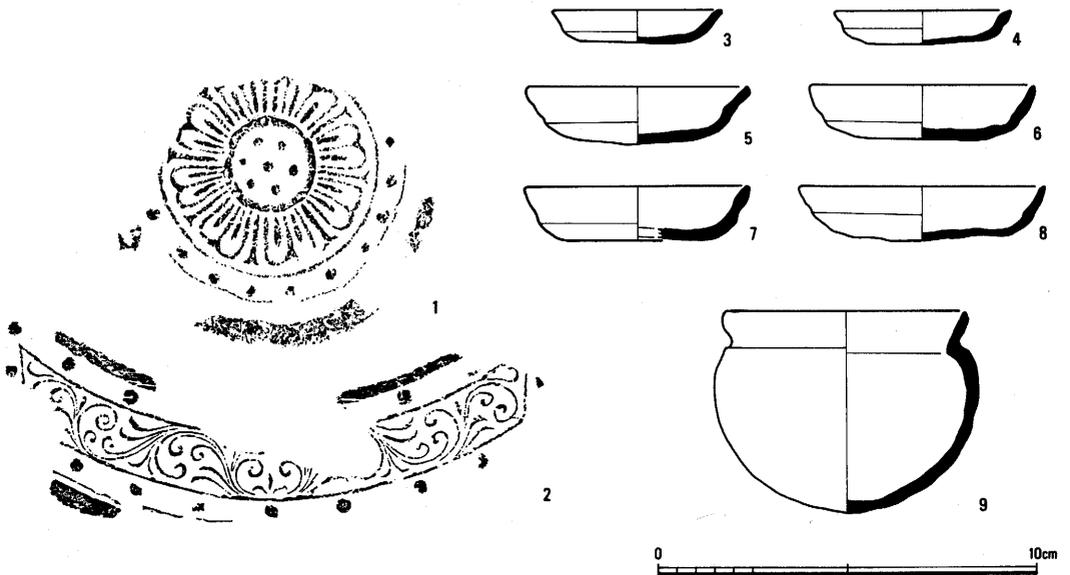


S K02 発掘区の北半で、南側へ緩やかに下降する落ち込みを確認したが、発掘区外北側へ広がる土壌の一部となる可能性がある。埋土は淡青灰色の砂礫で、人頭大前後の自然石が多く含まれる。黒色土器片、須恵器片とともに奈良時代の瓦が多量に出土した。



### Ⅲ 出土遺物

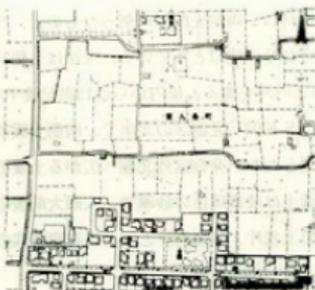
1は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。太めの圈線で画された中房には1 + SE01平面・立面図 1/100  
6の蓮子を配し、外区には珠文を巡らす。平城宮6235型式に属す。2は均整唐草文軒平瓦。対葉形の宝相華を中心飾りとし、その左右それぞれに3回反転する唐草文を飾る。外区には大振りな珠文を配す。平城宮6732-H型式と同範である。1・2はいわゆる「東大寺式」と称される軒瓦で、ともにS K02から出土した。3～8はS E01出土の土師器皿。大きさによって、小皿(3・4)と大皿(5～8)とに区別できる。いずれも外傾する口縁部と平坦な底部とからなり、口縁端部は丸くおさめている。口縁部内外面ともによこなでを施す。13世紀の後半に位置付けられよう。9は包含層出土の土師器甕。球形の体部と短い口縁部とからなる。(篠原 豊一)



S X02出土軒瓦, S E01・包含層出土土器 1/4

#### 4. 平城京左京七条四坊三坪の調査

本調査は、奈良市東九条町谷1175番地の2他において行った、宅地造成にともなう事前調査である。調査地は、大安寺旧境内の南に接した水田で、平城京の条坊では、左京七条四坊三坪の北辺にあたり、遺存地割から七条条間路南側溝の存在が予想された。調査はこの七条条間路の南側溝の確認に主眼をおき、南北14m・東西3m（面積42㎡）の発掘区を設定した。調査は昭和57年6月1日から9日にかけて実施した。

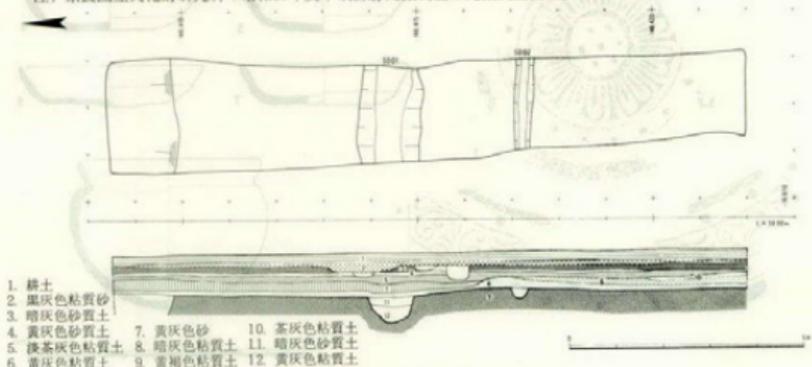


発掘区的位置 1/7500

発掘区の土層は、耕土、床土の下に、暗灰色土、黄灰色砂質土、淡茶灰色土、黄灰色砂、暗灰色粘質土が堆積し、その下の黄褐色粘質土上面において遺構を検出した。

検出した遺構はS D01とS D02の溝2条である。S D01は、幅約1.2m・深さ約60cmの素掘り溝で、溝内より、奈良時代の瓦、土器が若干出土し、七条条間路南側溝である可能性が考えられる。S D02は、幅約30cm、深さ約20cmの素掘り溝で溝内からの出土遺物はない。七条条間路については、右京七条二坊においてその北側溝北肩が検出されているが、南肩は確認されておらず溝幅については明らかでない。今、仮に七条条間路の幅員を2丈程度と推定するならば、その位置関係から、七条条間路も他の東西条坊と同じく西で南に振れているものと推測することができる。しかしながら、これ以上の検討は調査成果の蓄積をまたねばならない現状にある。（森下恵介）

注）奈良国立文化財研究所「昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1981



- |            |           |            |
|------------|-----------|------------|
| 1. 耕土      | 7. 黄灰色砂   | 10. 茶灰色粘質土 |
| 2. 黒灰色粘質砂  | 8. 暗灰色粘質土 | 11. 暗灰色砂質土 |
| 3. 暗灰色砂質土  | 9. 黄褐色粘質土 | 12. 黄灰色粘質土 |
| 4. 黄灰色砂質土  |           |            |
| 5. 淡茶灰色粘質土 |           |            |
| 6. 黄灰色粘質土  |           |            |

検出遺構平面図・東壁堆積土層図 1/1200

## 5. 平城京左京六条二坊十六坪（五条大路）の調査

本調査は、奈良市大安寺西1丁目281番地において実施した、宅地造成工事に伴う事前調査である。調査地は、東側に佐保川、西側に菟川の南流する河川にはさまれた低湿の沖積地で、平城京の条坊復原では左京六条二坊十六坪の北半にあたり、北辺には五条大路南側溝の存在が予想された。調査は、造成工事が先行した事情で発掘区の設定に制約を受けたが、五条大路の想定される箇所に東西11m・南北25m（275㎡）のトレンチを入れることができた。調査の期間は、昭和57年8月23日から同

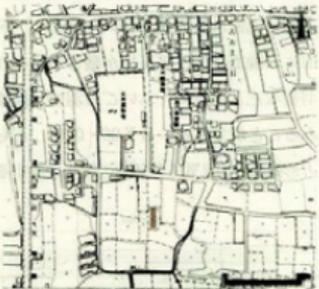


発掘区的位置 1/7500

年9月8日までである。調査の結果、黄褐色粘土の地山上面で近世の素振り溝1条と時期不明の自然流路1条とを検出したが、平城京に懸わる遺構は検出できなかった。流路は北から南西方向をとり、幅2.7~3.9m、深さ50cm前後である。溝内には灰色の粗砂が堆積し、溝底近くでは流木の小片が含まれる。佐保川氾濫の折に生じた一支流路であろう。（中井 公）

## 6. 古市町内遺物散布地の調査

本調査は、奈良市古市町1263番地において実施した、奈良市立古市児童センター他の建設に伴う事前調査である。調査地の周辺は、奈良時代遺物散布地として知られており、土師器片が奈良県教育委員会による分布調査の際、採集されている。今回の調査地そのものは、分布調査によって明らかになっている遺物散布地の範囲にわずかにかかるだけでその中心部ではない。発掘区は南北25m、東西6m（面積150㎡）で、調査は昭和57年8月21日から27日まで行った。



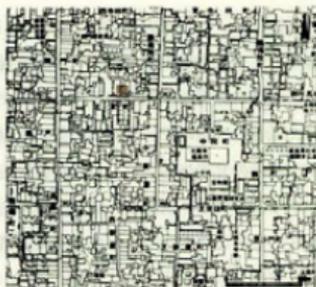
発掘区的位置 1/7500

調査の結果、耕土、床土の下に、15cm程度の厚さで黄色砂質土層が堆積しているだけで、その下には、茶褐色砂質土層と砂礫層が広がっており、さらに1m程度掘り下げたが、砂礫層がつぶき、何ら遺構は検出できなかった。遺物は、須恵器片、瓦片が、近世陶器とともに黄色砂質土層よりわずかに出土したにすぎない。出土した遺物については、磨滅しており、東方の遺物散布地より流されてきたものと考えられる。（森下 恵介）

## 7. 元興寺食堂跡推定地の調査

### I はじめに

本調査は、奈良市が計画した都市計画道路杉ヶ町高畑線の建設に伴う事前調査である。調査地は、奈良市北室町18～21番地他で、元興寺食堂跡推定地の西辺および南辺にあたる。調査は、現市道の拡幅予定地内にA・B2箇所のトレンチを入れ、加えてBトレンチに北接してCトレンチを設けた。調査の期間は昭和57年12月6日から翌58年1月31日までで、全調査面積は260㎡である。



### II 検出遺構

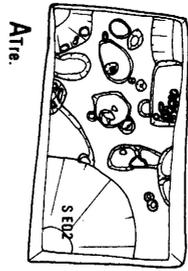
発掘区的位置 1/7500

検出した主な遺構は、中世から近世にかけての土壌、井戸、柱穴群が大半を占め、奈良時代のもは、わずかにBトレンチで検出した溝S D01があるにすぎない。井戸S E02は、Aトレンチ南東隅で検出した素掘り井戸で、深さ約3mを測る。井戸内からは14世紀後半の土器類が出土した。井戸S E03は、Cトレンチで検出した径約0.9mの円形石組井戸で、深さ約1.8mを測る。現代のものである。土壌S K04は、Cトレンチ南東で検出した一辺約0.6mの方形土壌で、深さ15cm内外と浅い。拡内には50cm大の鉄滓塊が遺存していた。S K04北側で検出したS X05は、一辺3m、深さ10cmほどの方形に近い掘り込みの中央に、さらに二段に掘った井戸状の土壌をもつ遺構。上段は最大径1.3mの袋状に、下段は径1mの円筒状に掘られ、深さ約1.9mを測る。底部には陶器甕片、平瓦片が敷きつめられる。内部からは、16世紀末から17世紀にかけての土師器羽釜などととも、ふいごの羽口、鉄滓が出土しており、S K04などと同様に铸造関係の遺構とみることができる。S X06・07は、ともに埋葬施設である。S X06は、南北2.7m、東西1.8m方形掘形内に2列6個体分の甕を埋置するための穴が掘られているが、甕は遺存していなかった。



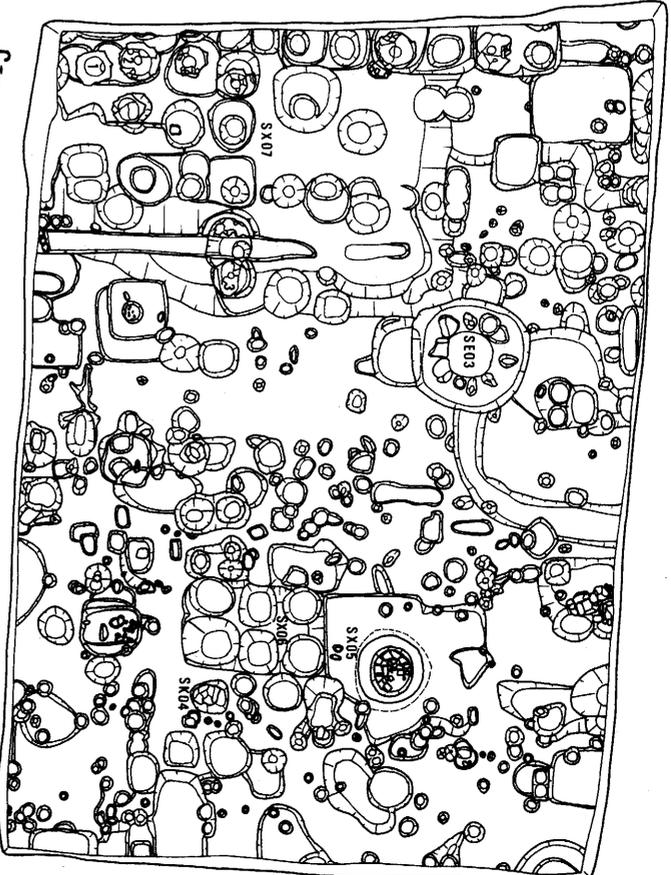
- |              |              |           |            |                       |
|--------------|--------------|-----------|------------|-----------------------|
| 1. 淡灰色土 (盛土) | 6. 黒灰色土      | 11. 茶褐色土  | 16. 暗茶褐色土  | 20. 淡灰色粘質土            |
| 2. 暗灰色礫土     | 7. 淡黒灰色砂質土   | 12. 灰色土   | 17. 黒色砂質土  | 21. 暗黒灰色土             |
| 3. 黒色粘質土     | 8. 黄褐色土      | 13. 黄色土   | 18. 黒色土    | 22. 暗灰色粘質土 (S X 07埋土) |
| 4. 黒灰色土      | 9. 赤褐色土 (機土) | 14. 暗茶褐色土 | 19. 淡灰色粘質土 | 23. 黄灰色礫土 (地山)        |
| 5. 淡灰色土      | 10. 暗灰色土     | 15. 黒色土   |            |                       |

Cトレンチ西壁堆積土層図 1/100



-15,280,000

+146,340,000



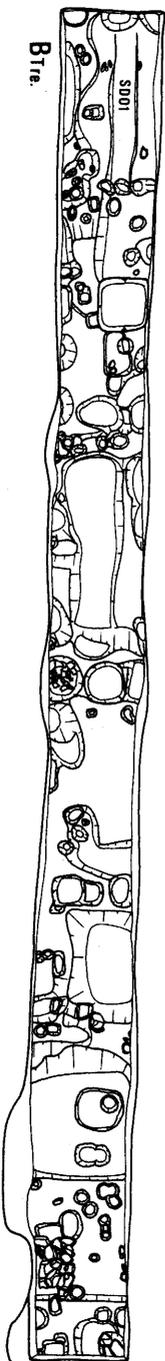
Cra.

+146,915,000

+146,920,000

+146,925,000

+146,930,000



Bire.

-15,340,000

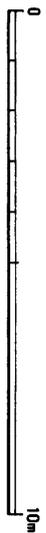
+15,335,000

+15,330,000

+15,325,000

+15,320,000

+15,315,000



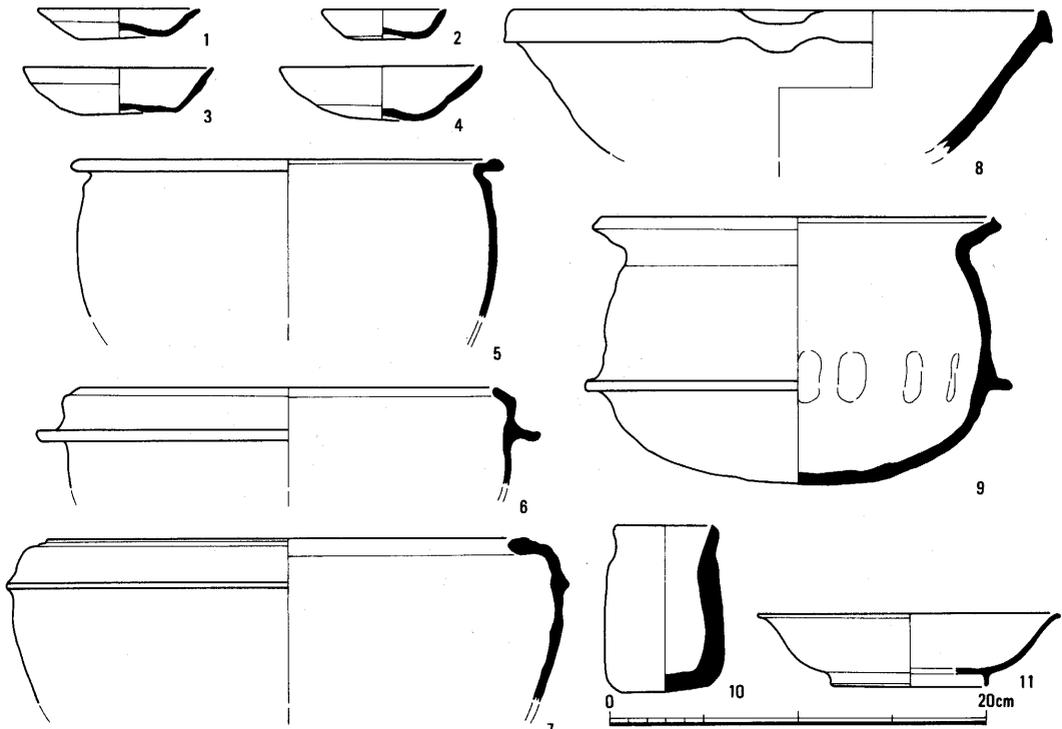
檢出遺構平面圖 1/150

S X07は、東西9 m以上、南北18m以上の大規模な掘形内に、東西6列以上で南北14列以上の甕を埋置していたものと考えられる。中で35箇所の埋置穴を確認したが、うち15箇所には甕が遺存していた。埋置穴には重複関係がみられ、数回にわたる造り替えのなされたことがわかる。遺存していた甕は、常滑窯系あるいは備前窯系のもので、14世紀から15世紀にかけてのものである。甕内および埋置穴には焼土がみられたことから、火災によってこの遺構が廃絶したことがうかがえる。

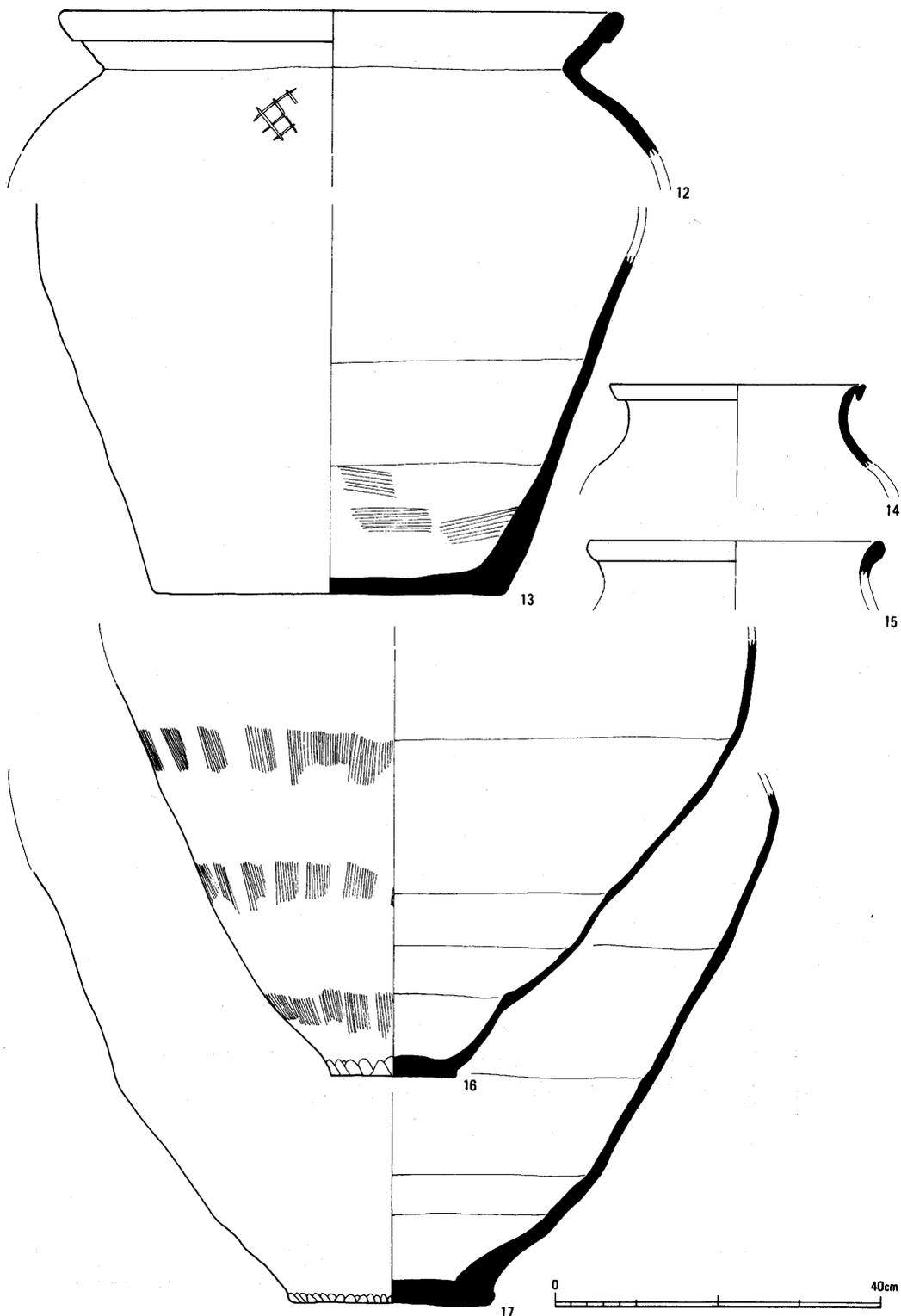
以上のように、今回の調査では、元興寺食堂に直接懸わると思われる遺構は検出することができなかった。しかしながら、中世・近世の奈良町の様相をうかがい知る上では、少なからぬ成果を上げることが出来たといえよう。

### Ⅲ 出土遺物

出土遺物には、土師器皿（1～4）、土師器羽釜（5～7・9）、土師器壺（10）、須恵器鉢（8）、陶器甕（12～17）白磁皿（11）などがあるが、そのほとんどは未整理の段階である。1～8はS E02から出土した土器で14世紀後半のまとまった資料となり得るものである。9はS X 05から出土した土師器羽釜で、鐙部が低い位置につけられ、16世紀末～17世紀にその時期を求めることができる。10はAトレンチの包含層から出土した近世の塩壺。11はS X07の埋土上層から出土した16世紀中国景德镇系の白磁皿である。12・13はS X07埋甕1に使用された備前窯系の甕、14～16は埋甕3に、17は埋甕2に使用された常滑窯系の甕と考えられる。（篠原豊一）



S E02・S X05・包含層出土土器 1/4

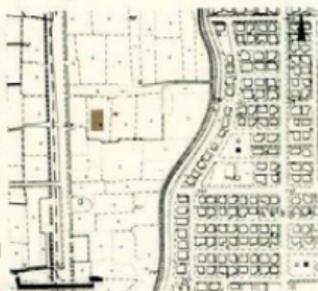


S X07出土陶器圖 1 / 8

## 8. 平城京左京五条二坊二坪の調査

### I はじめに

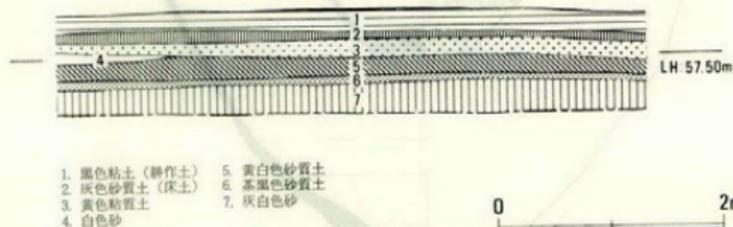
本調査は、奈良市大安寺町字出袋531番地の2・3、同  
 狐塚538・539番地において、建築資材置場建設に伴なう  
 事前発掘調査として実施した。当該地は、平城京の条坊で  
 は左京五条二坊二坪に相当する。調査は、敷地の中央に東  
 西16m、南北29m（464㎡）の第1発掘区を、敷地北端に  
 一坪との坪境小路の確認を目的として、東西2m、南北5  
 m（10㎡）の第2・3発掘区を設定して行なった。調査期  
 間は昭和57年12月20日から昭和58年1月17日までである。



発掘区の位置 1/7500

### II 検出遺構

堆積土層の説明をした後、各遺構の概要を記述する。発掘区内の土層は次のようなものであつた。現在の耕作土以下、灰色砂質土、黄色粘質土と続き地表面下約0.8mで黄白色砂質土に達する。その下層には約15cmの厚さで茶黒色砂質土、灰白色砂層が堆積する。遺構はこのうち黄白色砂質土上面で検出した。検出した遺構は塀2条、建物2棟である。塀S A 01は発掘区中央で検出した東西塀。6間分を検出した。柱間は西から2.1m—2.1m—2.4m—2.4m—2.4m—2.1mである。西から数えて第1柱穴と第5柱穴に柱根が残存していた。遺構の重複関係から後述する建物S B 03より新しいことがわかる。塀S A 02は発掘区中央で検出した東西塀。2間分を検出した。柱間は3.0m—3.0mである。建物S B 03の目隠し塀であろうか。建物S B 03は発掘区東端で検出した東西棟。西妻柱列のみを検出した。柱間は2.4m—2.4mとなろう。建物S B 04は発掘区東北隅で1柱穴のみを検出した。発掘区外へのびるため全体の規模は不明であるが、建物S

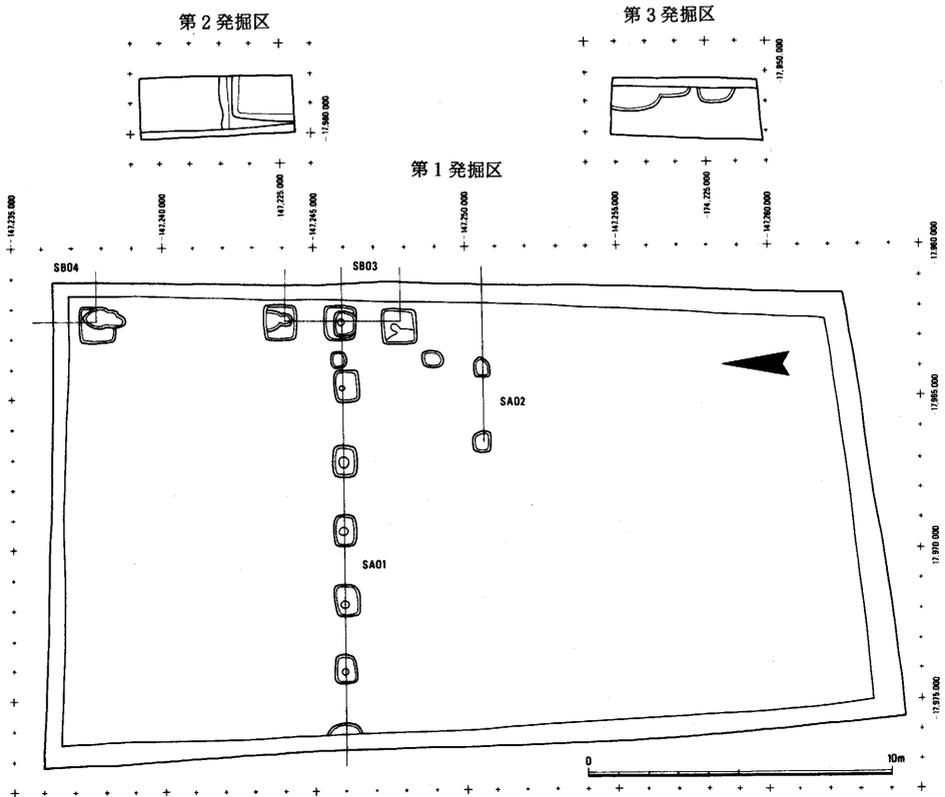


- |              |           |
|--------------|-----------|
| 1. 黒色粘土（耕作土） | 5. 黄白色砂質土 |
| 2. 灰色砂質土（床土） | 6. 茶黒色砂質土 |
| 3. 黄色粘質土     | 7. 灰白色砂   |
| 4. 白色砂       |           |

第1発掘区西壁堆積土層図 1/500

B03と妻柱筋をそろえる東西棟となる可能性がある。S B03, S B04のいずれにも柱抜取痕跡がある。これらの遺構はいずれも奈良時代のものであるが、中でも大きく2期に区分できる。第1期に属するものにはS A02, S B03, S B04があり、これらが廃絶した後第2期のS A01が設けられたものであろう。第2・3発掘区では奈良時代の遺構は検出できなかった。付近の遺存地割などからみても、一坪との坪境小路は今回の調査地より北側に位置するものと考えられる。また、全発掘区を通じて遺物はほとんど出土しなかった。最後に、塀S A01が二坪の中で占める位置を検討してまとめにかえる。塀S A01は国土方眼位を介して朱雀門心から南へ1251.510mの位置にある。ところが平城京の条坊は朱雀大路で国土方眼位に対して $N^{\circ} 15' 45'' W$ の振れをもつことが知られているので、これをとり修正を加えると両者間の距離は1254.052mとなる。ここで塀S A01が二坪の北辺から $\frac{1}{4}$ に位置すると仮定した場合の朱雀門心から塀S A01までの計画尺〔80尺(二条大路 $\frac{1}{2}$ 幅) + 3600尺(二坊幅) + 450尺(一坪幅) + 112.5尺( $\frac{1}{4}$ 坪幅)] = 4242.5尺で修正距離を除すると0.2954mとなる。この数値は平城京の造営単位尺としてほぼ妥当なものだと判断され、これによって塀S A01が二坪を4等分割する施設の一つであると考えられよう。

(西崎 卓哉)



検出遺構平面図 1 / 250

## 9. 平城京左京五条三坊十三坪の調査

### I はじめに

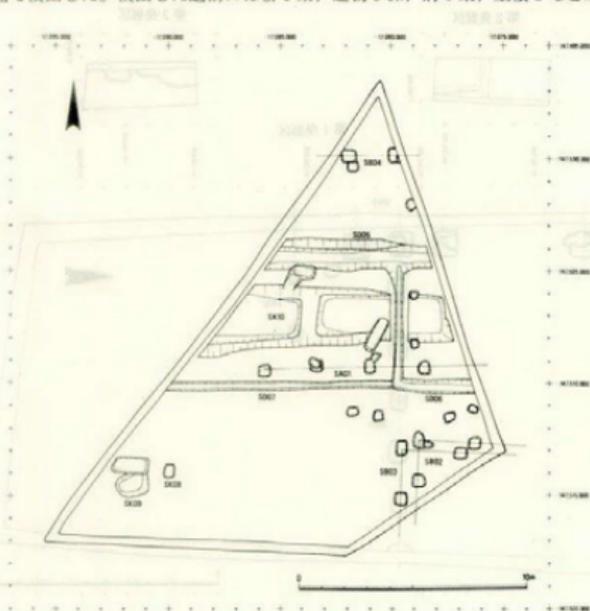
本調査は、奈良市大安寺町141番地の1において、農業用倉庫建設に伴う事前発掘調査として実施した。当該地は平城京の条坊では左京五条三坊十三坪に相当する。調査対象地の北側を国鉄関西線が、南側を市道大安寺第4号線が斜行しているため、不整形な発掘区(213㎡)を設定せざるをえなかった。調査は昭和58年1月19日に開始し、同年2月10日に現地での日程を終了した。



### II 検出遺構

発掘区の位置 1/7500

発掘区内の土層堆積状況は次のようなものであった。現在の耕作土以下、床土である灰色砂質土、茶灰色土と順次堆積し地表下約85cmで地山である黄白色粘質土に達する。遺構はいずれもこの地山上面で検出した。検出した遺構には塀1条、建物3棟、溝3条、土壇2などがある。以下



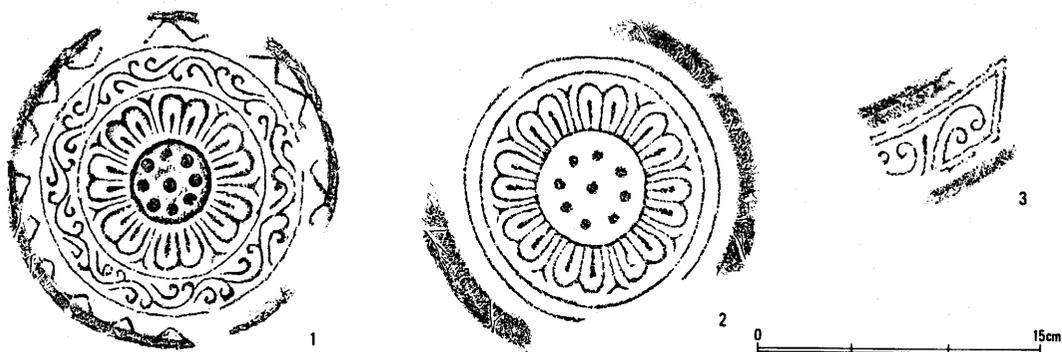
検出遺構平面図 1/250

遺構の概要を記述する。塀S A01は、発掘区中央で検出した東西方向の塀。3間分を検出した。柱間は2.4m—2.4m—2.4mである。建物S B02、S B03は発掘区南東隅で検出した掘立柱建物。いずれも発掘区外へのびるため全体の規模は不明。柱間は、S B02が東西方向2.4m、南北方向1.8m、S B03が東西方向2.7m、南北方向2.1mである。柱穴の重複関係がなく時期的な前後関係は不明。建物S B04は発掘区北端で検出した掘立柱建物。1間分のみを検出した。柱間は2.1m。溝S D05は発掘区北半で検出した東西方向の素掘り溝。幅1.3m前後、深さ0.4mを測る。埋土から土器、瓦が出土した。溝S D06はS D05に接続して掘られた素掘り溝。S D05との接続部から南へ3.7mのところまで西へほぼ直角に屈曲する。溝底面の高低差からみて、水流はS D06からS D05へ向かっていたものであろう。溝S D07は発掘区中央で検出した東西方向の素掘り溝。重複関係からS D06より古いことがわかる。先述したS D06は、このS D07を拡幅、S D05に接続したものであろう。土壌S K09は発掘区西南隅で検出したもの。東西1.4m、南北1.0m、深さ0.2mを測る。埋土から土師器、瓦が出土した。S K10は発掘区中央で検出した土壌。東西約5.6m、南北約2.5m、深さ約0.3mの長方形土壌が連続する。埋土から土器、瓦が出土した。

### Ⅲ 出土遺物

今回の調査では、遺構中及び遺構面を覆う遺物包含層から瓦、土師器、須恵器が出土した。いずれも奈良時代のものであるが、ここでは軒瓦について報告する。1は複弁7弁蓮華文軒丸瓦。突出した中房に1+8の大ぶりの蓮子を置き、外区内縁には左回りの唐草文を、外区外縁には線鋸齒文を配する。平城宮6348型式と同範である。S K09出土。2は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。細い圏線で囲まれる中房には1+8の蓮子を置く。二重の圏線で画された外区は無文である。平城宮6227型式に属するものである。S K10出土。3は均整唐草文軒平瓦。瓦当面对し右端のみが出土した。上方に開いたC字状の中心葉内に、平行する二条の縦線によって垂飾される花頭をもつ中心飾りから、左右に3回反転する唐草文を配するものとなろう。平城宮6663—F型式と同範である。

(西崎 卓哉)

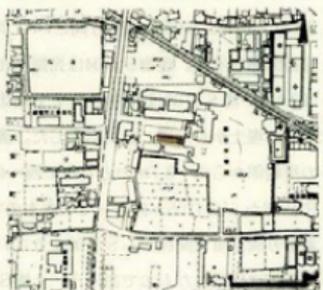


出土軒瓦拓影

## 10. 平城京左京五条五坊五坪の調査

### I はじめに

本調査は、奈良市西木辻町67番地において実施した、奈良市立春日中学校の校舎増築工事に伴う事前調査である。調査地は、平城京の条坊復原では左京五条五坊五坪の北辺中央にあたる。調査は、東西35m、南北12.5m(437㎡)の発掘区を設定して行ない、調査期間は、昭和58年2月1日から3月3日までである。



### II 検出遺構

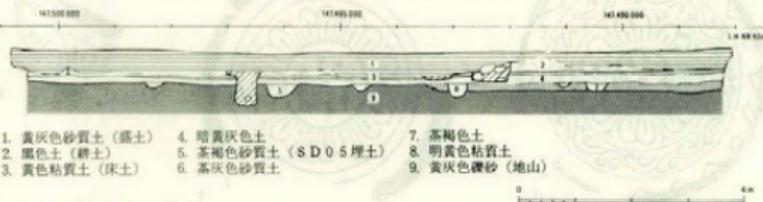
発掘区の堆積土層は、地表下約50cmまで校舎造成時の客土で、以下順に、旧耕土、床土、茶褐色砂質土と堆積し、地山の明黄色粘質土に至っている。このうち茶褐色砂質土からは、7世紀後半から奈良時代にかけての土器片が出土した。主な検出遺構は、掘立柱塼1条、掘立柱建物5棟、素掘り溝2条などである。

S A01 発掘区の南西隅で検出した全長2間(3.6m)の南北塼。柱間は1.8m等間である。主軸が国土方眼位北に対して、西へ $33^{\circ}30'$ 振れている。

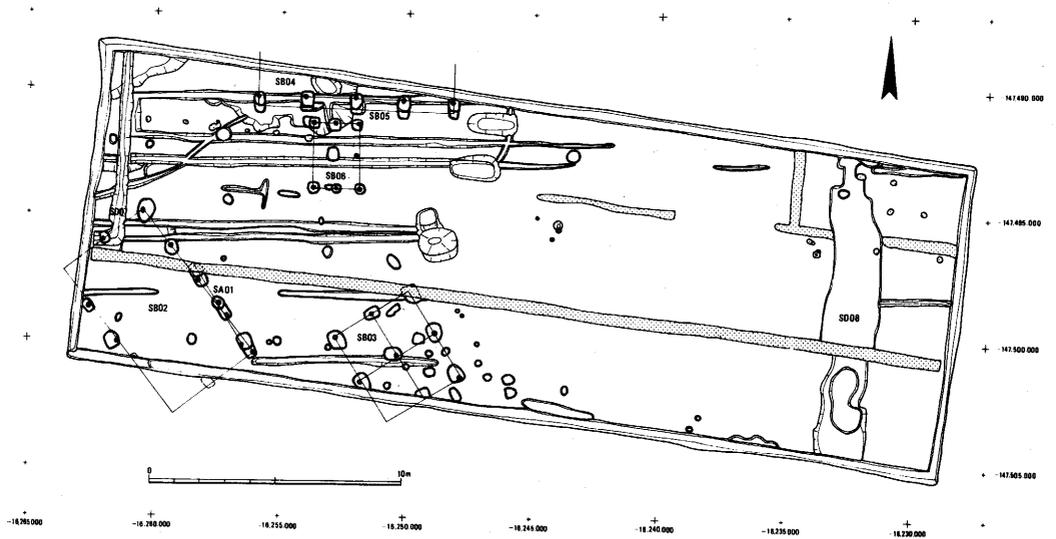
S B02 S A01と重複して検出した桁行4間(7.2m)、梁行2間(3.9m)の南北棟。柱間は、桁行が1.8m等間、梁行が1.95m等間である。柱穴は不整形で、掘形の埋土中からは7世紀後半の土器片が出土した。建物の主軸が国土方眼位北に対して、西へ $39^{\circ}17'$ 振れている。柱穴の重複関係から、S A01よりも古いことがわかる。

S B03 S B02東側で検出した東西2間(3.6m)、南北2間(3.9m)の総柱建物。柱間は、東西1.8m等間、南北1.95m等間である。建物の主軸が国土方眼位北に対して、西へ $32^{\circ}24'$ 振れる。

S A01、S B02・03は、国土方眼位に対する主軸の著しい振れからみて、同時期の遺構であると考えられる。その時期は平城京造営以前の7世紀後半であろう。



西壁堆積土層図 1/100



検出遺構平面図 1/250

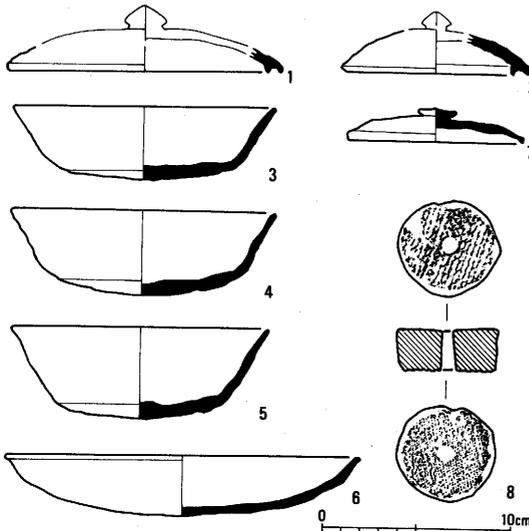
S B04 発掘区北壁近くで検出した全長4間(7.8m)の東西柱列で、東西棟の南側柱列と考えられる。柱間は1.95m等間。重複関係からS B05より新しいことがわかる。

S B05 S B04と同位置にある同規模の東西柱列で、これの前身建物であると思われる。

S B06 S B05南側にある桁行1間(3.6m)、梁行2間(1.8m)の南北棟。梁行は0.9m等間。

S D07 発掘区西端で検出した南北溝。幅0.4~0.5m、深さ25cm内外を測る。溝内には茶褐色砂質土が堆積し、奈良時代の土器片が若干出土した。南端で西へ折れ、発掘区外へのびる。

S D08 発掘区東端で検出した南北溝。幅1.5~2.3m、深さ20cm内外を測る。溝内には暗黄灰色の粘質土が堆積し、土師器片少量が出土。



出土遺物 1/4

### Ⅲ 出土遺物

遺物は、包含層から出土したものが大半を占める。1・2・7は須恵器蓋。身受けの返りをもつもの(1・2)と、返りのない扁平なもの(7)とがある。前者は7世紀後半、後者は8世紀のもの。3~4は須恵器杯。わずかに丸味を帯びた底部と、上外方に開く口縁部とからなり、底部外面はヘラ切りのまま放置されている。いずれも7世紀後半のもの。9は土師器皿。8は平瓦片を円形状に打欠き中央に小孔を穿ったもの。重さ69gを量る。用途は不明。(篠原 豊一)

## 11. 高畑町内遺物散布地の調査

本調査は、奈良市高畑町1476番地他において実施した奈良市の仮称第16中学校建設に伴う事前調査である。調査地は、御蓋山の南麓、能登川まで段状に形成された水田で、建設予定地に含まれる市之井池北西部は、奈良時代～室町時代の遺物散布地である。発掘調査に先立ち踏査を行った際、市之井池底において、土師器、須恵器、瓦器等の遺物を採集したが、池内については旧地表面より掘り下げて池がつくられており、遺跡は破壊されているものと判断された。このため、池の東側および南側における遺跡の有無を確認するためA～Cの発掘区を設け試掘調査を行った。調査期間は昭和58年3月10日から31日までである。

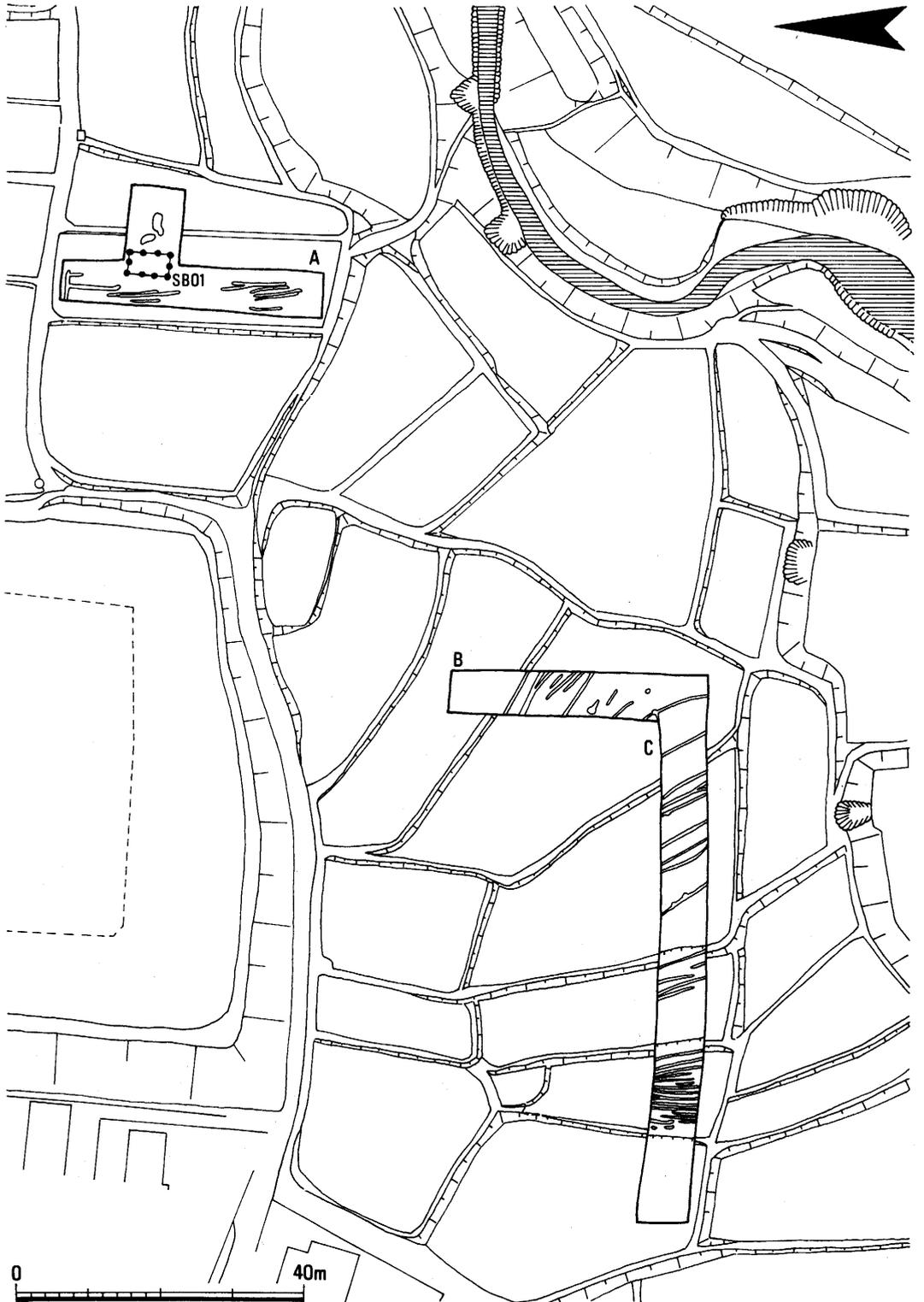


発掘区的位置 1/7500

Aトレンチ 東西6m、南北37mの発掘区で、調査地区内でもっとも標高の高い水田に設定した。土層は、耕土の下、灰褐色粘質土(15cm)の堆積があり、その下は茶褐色砂礫層の地山となる。地山面において、水田の耕作に伴うものと考えられる素掘り溝数条と建物を検出した。建物S B01は、桁行3間(5.4m)梁行2間(2.4m)の南北棟である。柱痕跡は径約15cmと小さい。時期については、柱掘形内よりの出土遺物がなく求め難いが、発掘区内においては、灰褐色粘質土層内より若干の須恵器片が出土している他、地表面において採集した遺物にも奈良時代のものの占める割合が多く、奈良時代の可能性が考えられる。なお建物の全体を検出するため調査区を東へ、幅7m、長さ10mの広さ拡張した。

Bトレンチ 市之井池の南側、Aトレンチを設定した水田よりも約5m低い水田に設定した。発掘区は東西6m、南北10mである。発掘区の基本的な土層は、耕土、床土の下、灰褐色粘質土(20cm)が堆積し、その下は、灰色細砂層、灰色砂礫層となる。灰色細砂層、灰色砂礫層はいずれも、調査地区内の小字「河原田」の名称が示すとおり、調査地区の南に流れる能登川によって形成された土層と考えられ、遺物はまったく含まない。遺構はこれらの土層上面において検出した水田耕作に伴うものと思われる畦畔に並行した素掘り溝だけである。

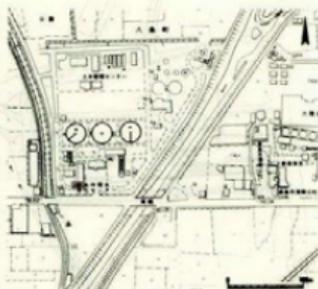
Cトレンチ Bトレンチ南端より西へ南北6m、東西75mの発掘区を設定した。Bトレンチを設定した水田とCトレンチ西端の水田との比高差は2.5mである。土層はBトレンチと同様で、地山は、西方へ傾斜する。検出遺構は各水田においてその畦畔に並行する素掘り溝だけで、その溝内よりは、土師器羽釜片、土師器皿片が出土し、溝の掘削の一部は中世のものであることがわかる。また耕土の下、灰褐色粘質土層よりは須恵器片、土馬が出土した。(森下 恵介)



検出遺構配置図 1/900

## 12. 平城京左京六条二坊十坪（東二坊坊間路）の調査

本調査は、奈良市大安寺西2丁目208番地において実施した、仮称奈良市埋蔵文化財調査センター建設工事に伴う事前調査である。調査地は最近まで奈良市衛生浄化センターの敷地として利用されたところの跡地で、新設建物の予定位置にはこの折の地下水汲み上げ施設と滅菌槽が残存していた。このため、地下遺構は既に失われていることが当初から予想されはしたが、同位置には平城京の条坊復原で東二坊坊間路の東側溝が想定されたために、空閑地を選んで調査を行なった。調査の期間は

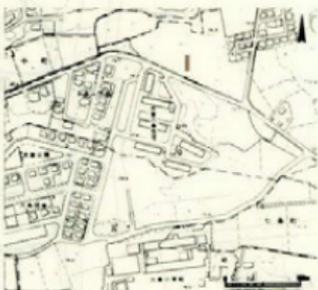


発掘区の位置 1/7500

昭和57年12月20日から25日までである。調査にあたっては当初東西17m・南北8mのトレンチを設定したが、埋管の残存や3.5mを越える深さなどの制約から、実際に地山面を促えたのは64㎡にすぎず、何ら遺構は検出できなかった。なお、堆積土層は地表下約2mまでが造成盛土、以下青灰色粘土が1.5mの厚さで堆積し、暗黄色粘質土の地山となっている。（中井 公）

## 13. 平城京右京五条四坊十三坪の調査

本調査は、奈良市五条町西山995番地の1で行ったマーカー建設に伴う事前調査である。調査地は西ノ京丘陵の一画であり、東からはいり込んだ谷筋に位置する。発掘区は東西5m、南北17m（面積85㎡）である。調査は、昭和58年2月21日から24日まで行った。



発掘区の位置 1/7500

発掘区の層位は、地表から約1.2mは造成した際の盛土、以下、耕土、床土、灰色粘質土とつづき、その下は、淡青灰色砂層と青灰色粘質土が5～10cmの厚さで互層となり堆積している。さに1.5m程度掘り下げたが、同じ様相がつづき、湧水が著しい。遺物の出土もなく、顕著な遺構も検出できなかった。平城京右京については、三坊、四坊の部分は西ノ京の丘陵地帯であり、丘陵上は、宅地として利用されたことがこれまでの調査で確認されている。また谷筋は右京二条四坊での調査では自然地形を確認しただけで、遺構は検出されていない。今回の調査の結果もこうした平城京右京の様相を裏づけるものとなった。

（森下 恵介）



## 82-1 次調査

本調査は、奈良市大安寺町東護麻堂1161番地の4において実施した、住宅の新築に伴う事前調査である。調査地は、大安寺旧境内賤院推定地の中央やや西寄りにあたる。調査は東西2.8m、南北6.8m(発掘面積19㎡)の発掘区を設定して行ない、調査期間は昭和57年6月7日から6月12日までである。

発掘区の土層堆積状況は、地表面から近現代の盛土である黄灰色土、黒色土が約40cmにわたっており、以下、旧耕土の黒灰色土(約30cm)、包含層の淡褐色砂礫土(約30cm)が堆積し地山の淡茶灰色砂土に至る。調査の結果、発掘区の南東隅で一辺0.6m、深さ0.1mの平面形状の土壇を検出した。埋土は明黄灰色粘質土で遺物は含まない。包含層からは奈良時代の軒平瓦、瓦片、土器片が出土したが、顕著な遺構は何ら検出できなかった。(篠原 豊一)

## 82-2 次調査

本調査は、奈良市大安寺町ヒラキ1161番地の1において実施した、住宅の新築に伴う事前調査である。調査地は、大安寺旧境内賤院推定地の中央やや西寄り、82-1次調査地の東隣に位置する。調査は東西6.0m、南北3.0m(発掘面積18㎡)の発掘区を設定して行ない、調査期間は昭和57年10月1日から10月6日までである。

発掘区の土層堆積状況は地表面から近現代の盛土である黒灰色砂土が50~70cmにわたっており、以下順に、旧耕土の黒色粘土(20~30cm)、包含層の淡青灰色粘質土(10~20cm)が堆積し、地山の淡黄色粘土に至る。包含層から奈良時代の土器片、瓦片が少量出土したが、遺構は検出できなかった。81-1・2次の調査はともに賤院推定地のほぼ中央部で行なったものであるが、調査範囲も狭く成果を得ることが出来なかった。今後に期待したい。(篠原 豊一)

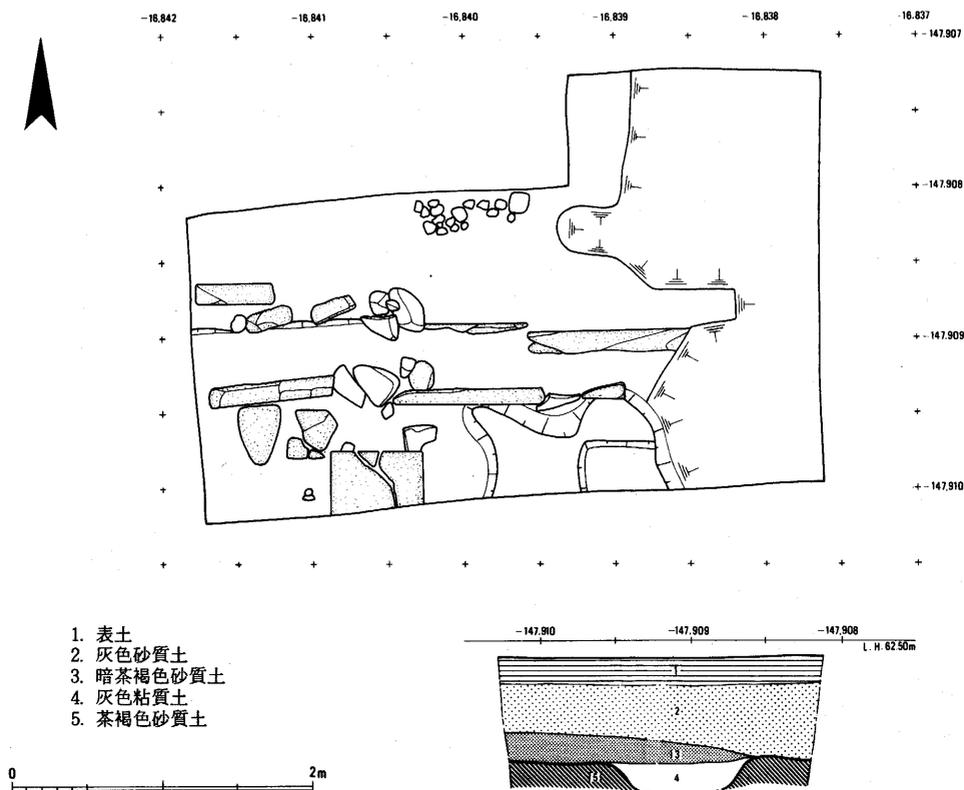
## 82-3 次調査

本調査は、奈良市大安寺町1125番地において行った、住宅増築工事に伴う事前調査である。調査地は、大安寺寺域に含まれる杉山古墳前方部の西南に位置する。民家中庭における調査のため発掘区は、南北4m、東西1mと制約を受けざるを得なかった。調査は昭和58年2月14日に行った。発掘区の土層は表土の下、灰色砂質土(約10cm)、黄灰色粘質土(約8cm)の推積があり、その下には灰色砂礫層が広がる。この砂礫層は、これまでの隣接地の調査でも確認されており杉山古墳周濠の埋土と考えられる。一部掘り下げたが湧水が著しく、発掘区の面積の制約から掘り下げを断念した。出土遺物はない。大安寺北面中房の北方にあたる調査地の周辺は『大安寺縁起并流記資材帳』に「一坊池并岳」とあるように、奈良時代においては杉山古墳の周濠が残されていたものと思われる。(森下 恵介)

## 82-4 次調査

本調査は、奈良市大安寺町1147番地において行なわれた奈良市立大安寺小学校の土塀撤去とフェンス設置工事の立会の際に、基壇化粧と考えられる凝灰岩切石が発見されたために急ぎ実施した調査である。調査地は、大安寺小学校校庭東北隅で、北面中房が講堂北面より北へのびる軒廊につながるあたりに相当する。調査区は、フェンスの基礎部分をやや拡張した東西4m、南北2mの範囲で、昭和58年2月15日、16日の2日間を費やした。

調査の結果、東西方向に据付けられた凝灰岩切石列2条を検出した。切石列は原位置を保たないものもあり、北側のものが北面、南側のものが南面に面を取り、約50cmの間隔で断続的に並行する。また石列の間には焼土、瓦類を多く含んだ灰色粘質土が堆積し、石列の外側には基壇築成土かと考えられる茶褐色砂質土層がみられる。これらの点から、今回検出した石列は基壇内に設けられた石組み溝の一部である可能性が考えられる。しかしながら溝とするには石列のいずれも外側に面を取ることなど、不自然な点も多い。切石は比較的残存のよいもので幅15cm、長さ1m、高さ40cmで、これを基壇化粧と考えるならば、時期の異った基壇の重複ともみられる。これ以上



1. 表土
2. 灰色砂質土
3. 暗茶褐色砂質土
4. 灰色粘質土
5. 茶褐色砂質土

82-4 次調査検出遺構平面図・西壁堆積土層図 1/50



82-4 次調査出土軒平瓦拓影

の調査は、立会調査といった性格のために行わないこととし、石列の性格については、今後に計画される大安寺の保存整備時の調査に期すことにした。

調査で出土した遺物は丸瓦、平瓦が大半であるが2点の軒平瓦が出土した。1は、平城宮6717-A型式、2は平城宮6712-B型式であり、いずれも大安寺において比較的多く用いられた軒平瓦である。時期については、やや退化した均整唐草文から8世紀後半と考えられている。(森下 恵介)

## 82-5 次調査

本調査は、奈良市東九条町1412番地において、住宅建築の申請に対して実施した事前調査である。調査地は、平城京条坊の左京七条四坊十坪の東辺にあたり、大安寺の花園院に想定されているところで、昭和52年にはこれのすぐ東隣で奈良県教育委員会が十・十五坪間の小路確認を目的とした調査を行なっている。調査の期間は昭和58年3月8日から10日までの3日間で、東西5m・南北9m(45㎡)の範囲を発掘した。調査地はそれまで畑地として利用されていたが、床上げがなされて周囲よりも一段高く、耕作土・床土の下には約50cmの厚さで茶褐色砂が入られている。これの下に厚さ30cmほどの青灰色粘質土の包含層があり、瓦や須恵器の細片をわずかに含んでいる。これより下が灰色粘土の地山となるが、床上げ前の農業水路の痕跡がみられたほかには遺構は何ら検出することができなかった。(中井 公)

## 82-6 次調査

本調査は、奈良市大安寺町ヒラキ1265番地の4において、農業倉庫建築の申請に対して実施した事前調査である。調査地は大安寺伽藍の復原では、東中房北列(東面僧房)の東外側にあたり主要な建物はないとされるところである。調査前は畑地として利用されていたが、床上げされて周囲より一段高くなっている。調査の期間は昭和58年3月16日から23日までで、東西5m・南北8m(40㎡)の範囲を発掘した。発掘区内の堆積土層は、耕作土・床土の下、黄褐色砂質土、暗灰色粘質土、灰褐色砂質土と続き、地表から約80cmで灰色礫の地山となる。検出された遺構は、発掘区の西辺近くで西側に広がりをもつと思われる土壙状の窪みがみとめられただけで、他には何ら顕著な遺構をみだせなかった。この窪みには暗灰色の粘土が堆積しており、中からは奈良時代から中世にかけての瓦の小片若干が出土した。(中井 公)

# 圖 版



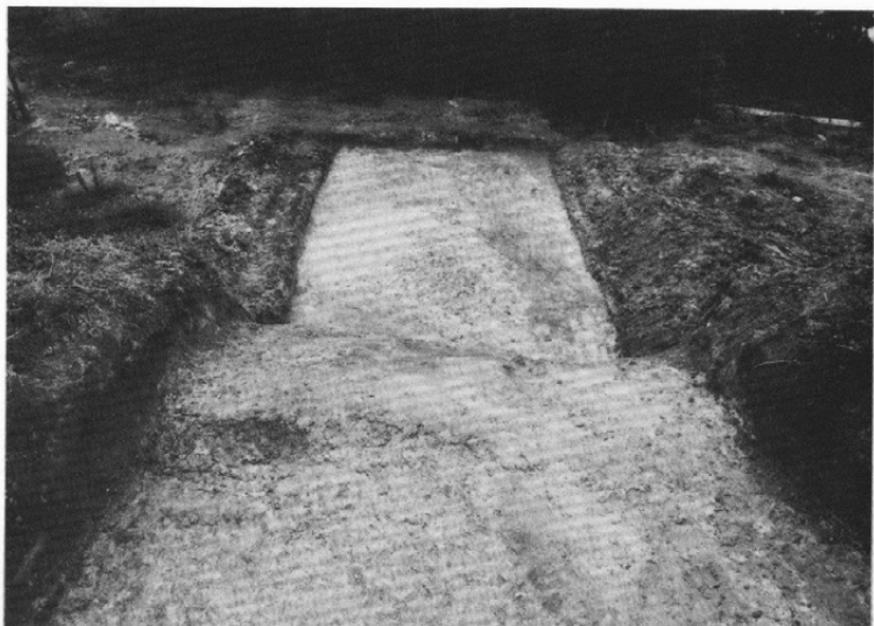
1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（西から）



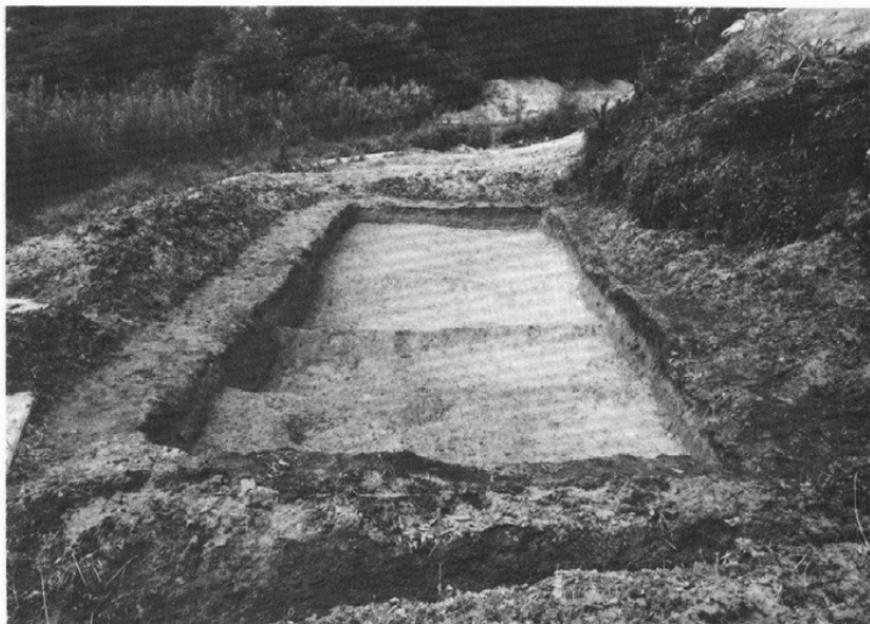
1. Aトレンチ全景（西から）



2. Aトレンチ東端部（西から）



3. Bトレンチ全景（西から）



4. Bトレンチ全景（東から）



5. Cトレンチ全景（西から）



6. Cトレンチ全景（東から）



7. Dトレンチ全景（東から）



8. Dトレンチ全景（西から）



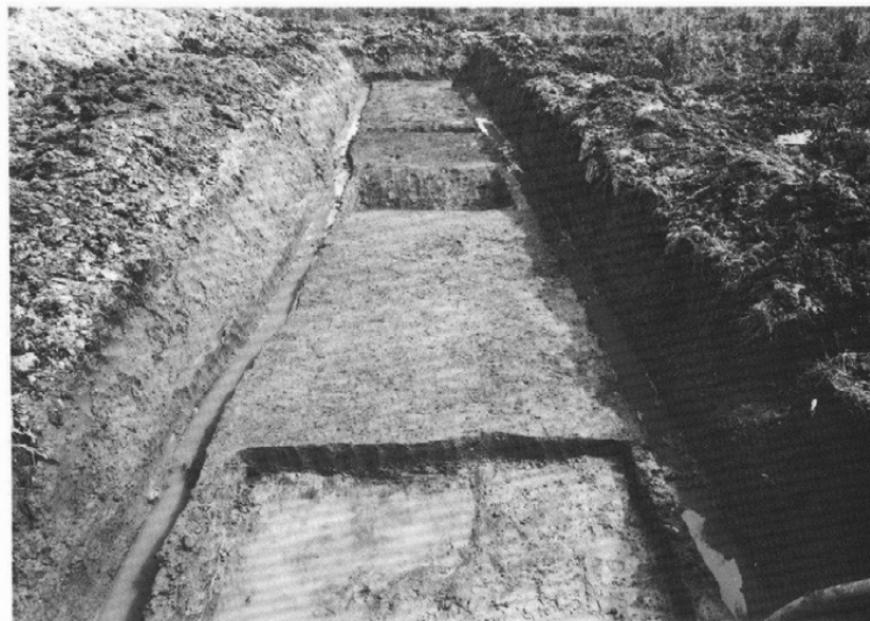
1. 発掘区全景（南から）



2. SE01全景（西から）



1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



1. Aトレンチ全景 (西から)



2. Bトレンチ全景 (東から)



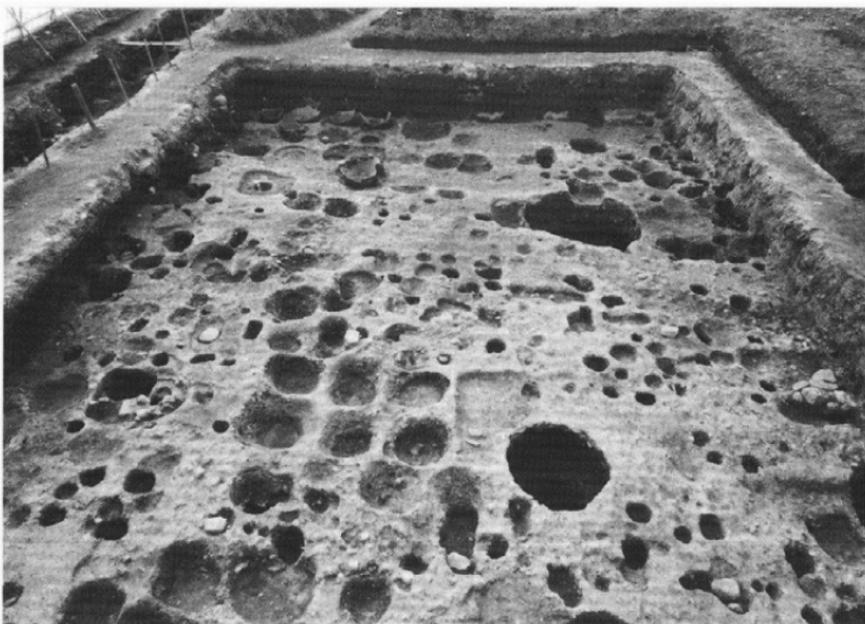
3. Cトレンチ上層全景(西から)



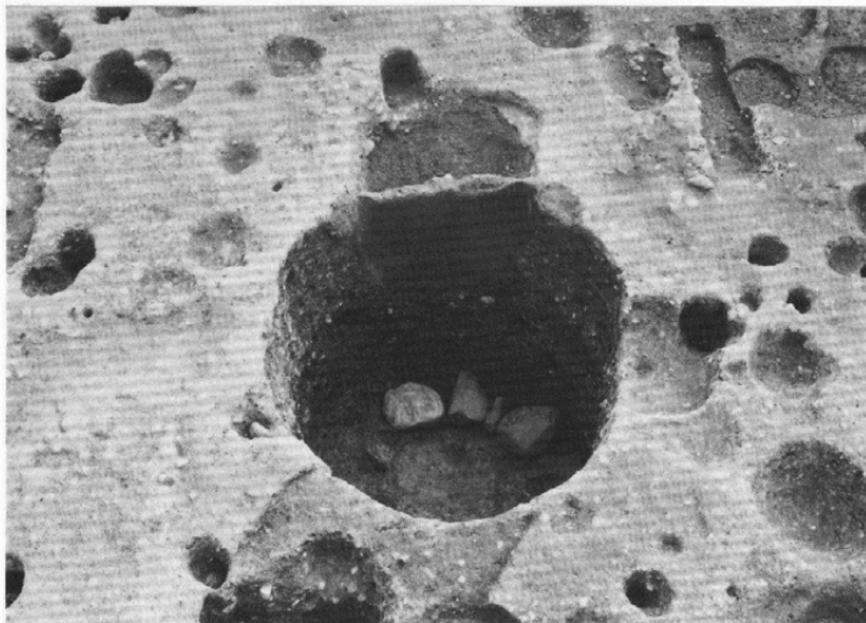
4. Cトレンチ上層全景(北から)



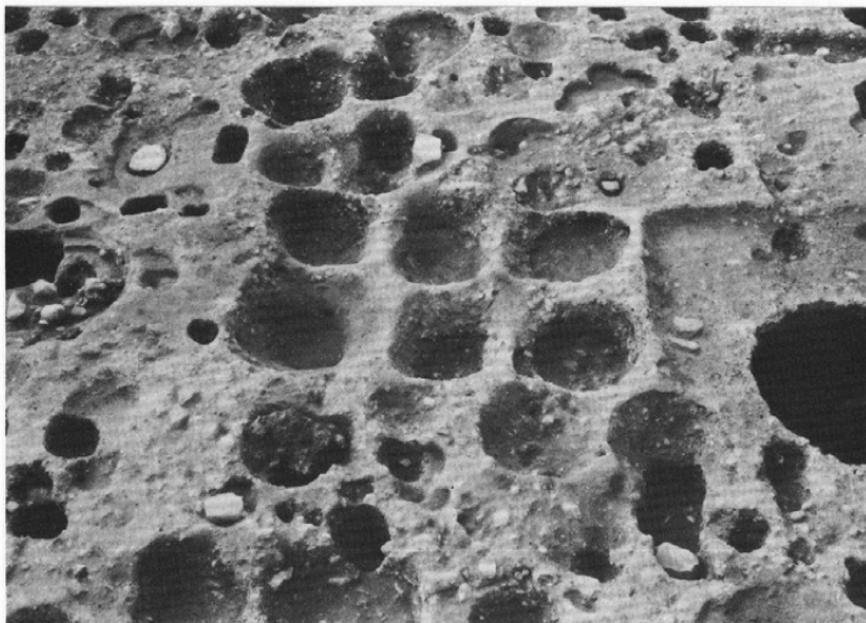
5. Cトレンチ下層全景 (西から)



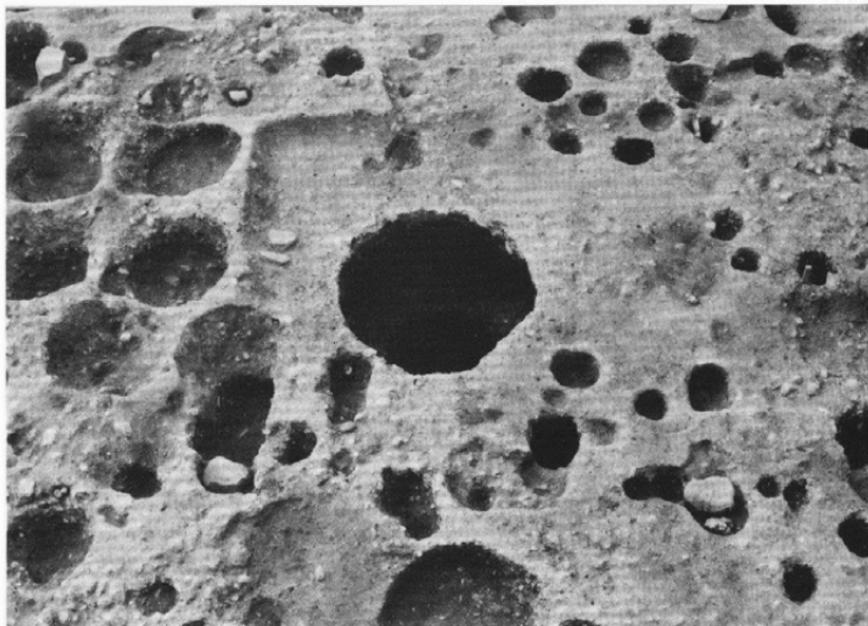
6. Cトレンチ下層全景 (東から)



7. SE03 全景 (北から)



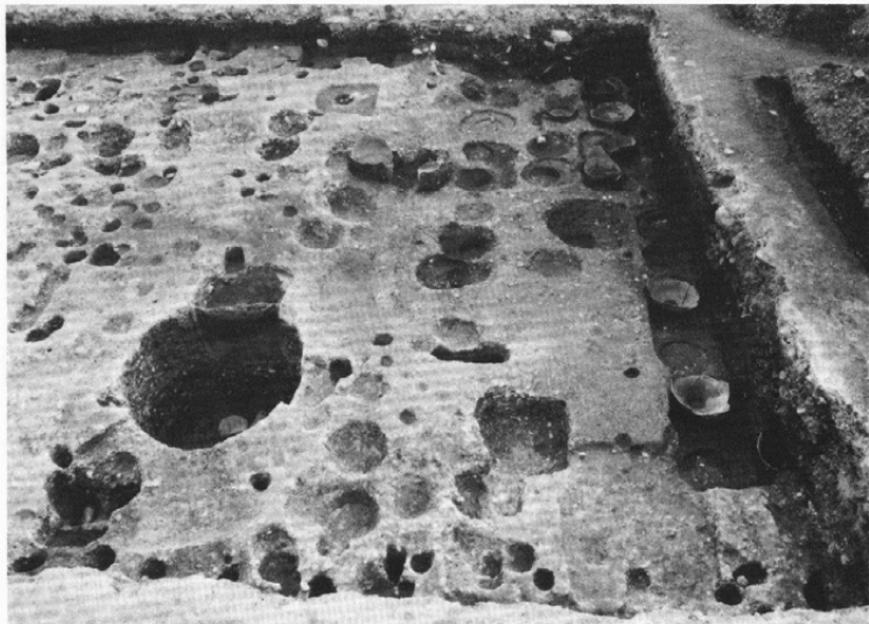
8. SX06 全景 (東から)



9. SX05 全景 (西から)



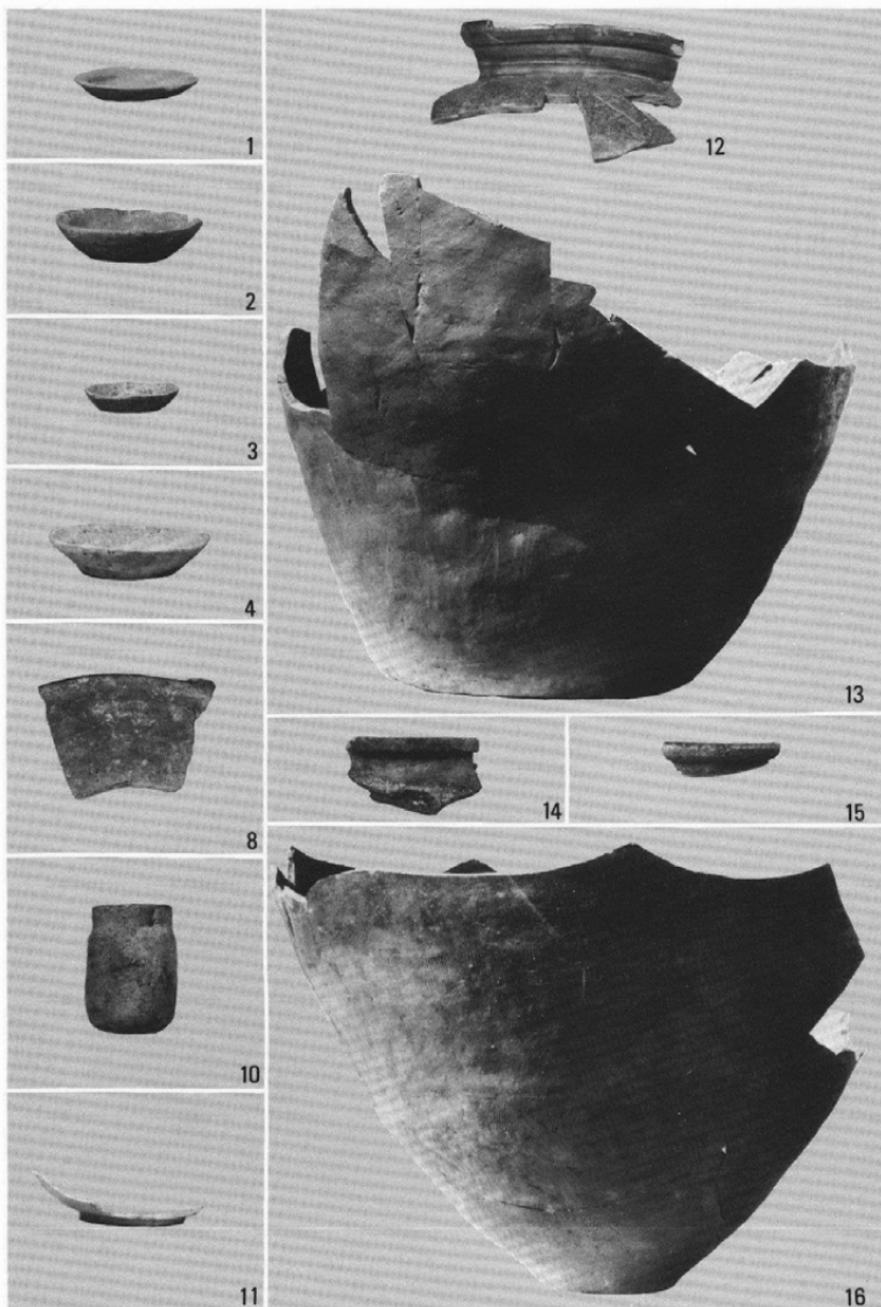
10. SX05 部分 (西から)



11. SX07 全景 (北から)



12. 大甕 1・2 (南から)

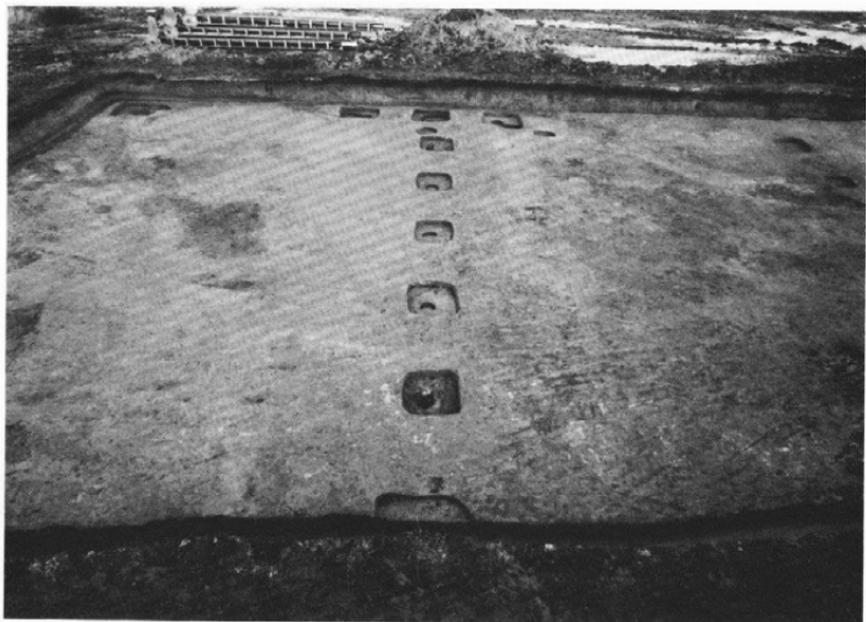




1. 発掘区全景(南から)



2. 発掘区全景(北から)



3. 塙SA01 (西から)



4. 塙SA02 (西から)



5. 建物SB03 (西から)



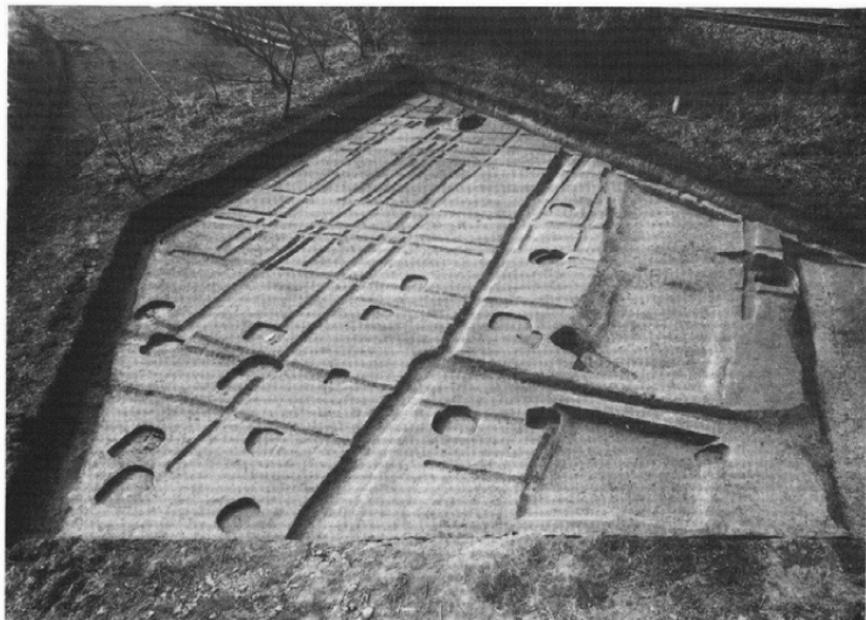
6. 建物SB04 (西南から)



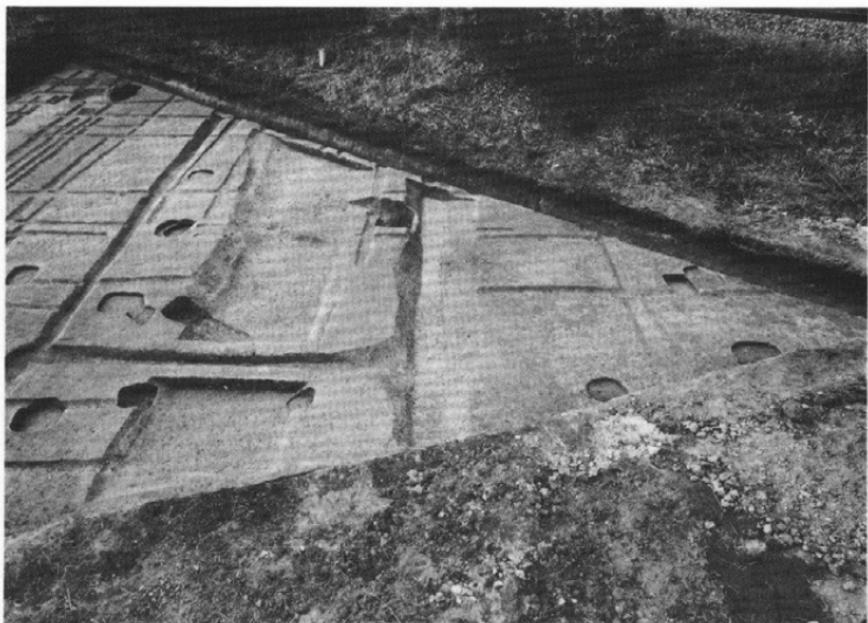
7. 第2発掘区全景(南から)



8. 第3発掘区全景(南から)



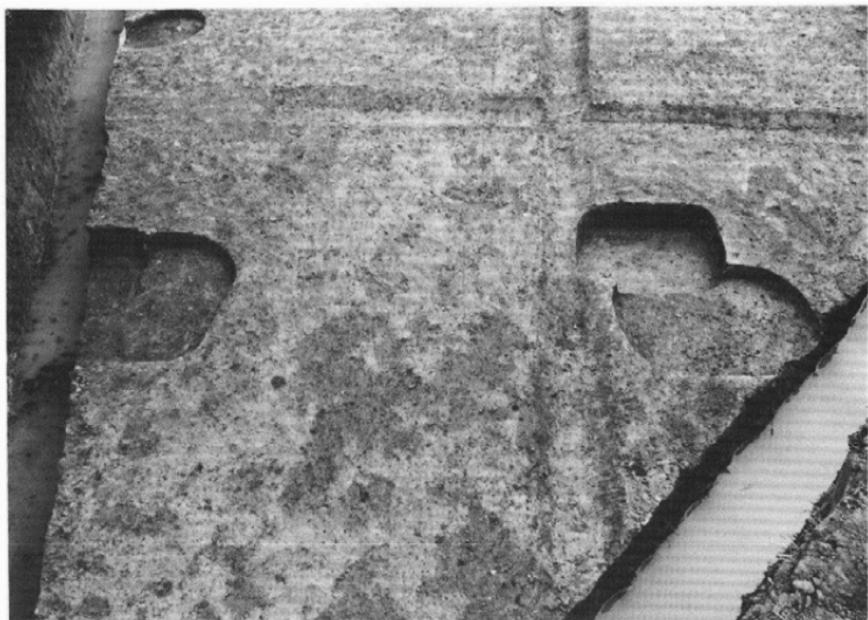
1. 発掘区全景 (東から)



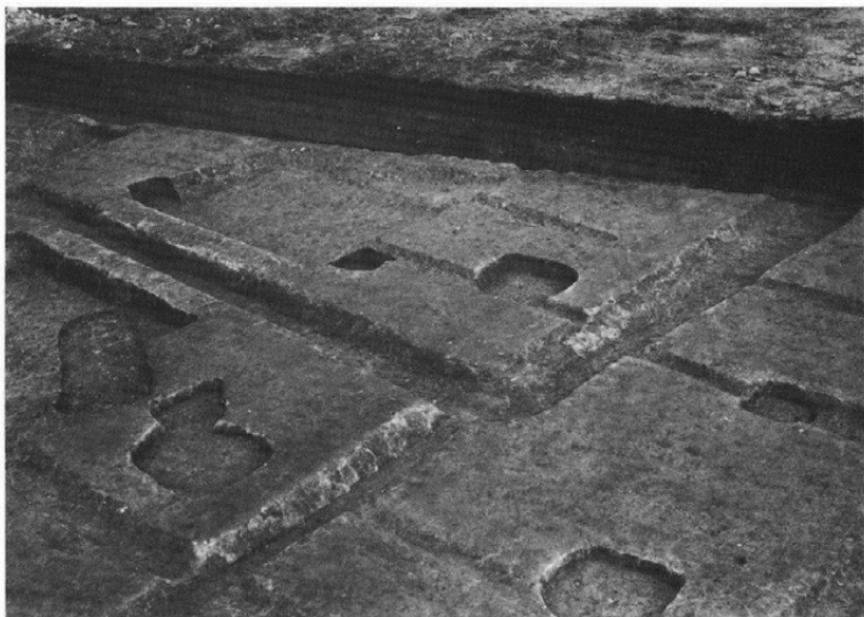
2. 発掘区全景 (東から)



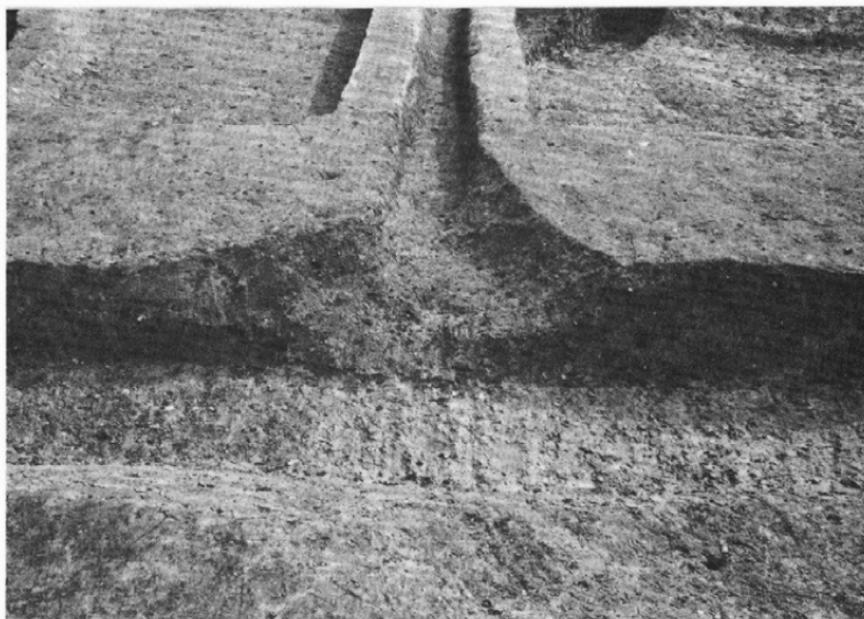
3. 建物SB02・SB03 (西から)



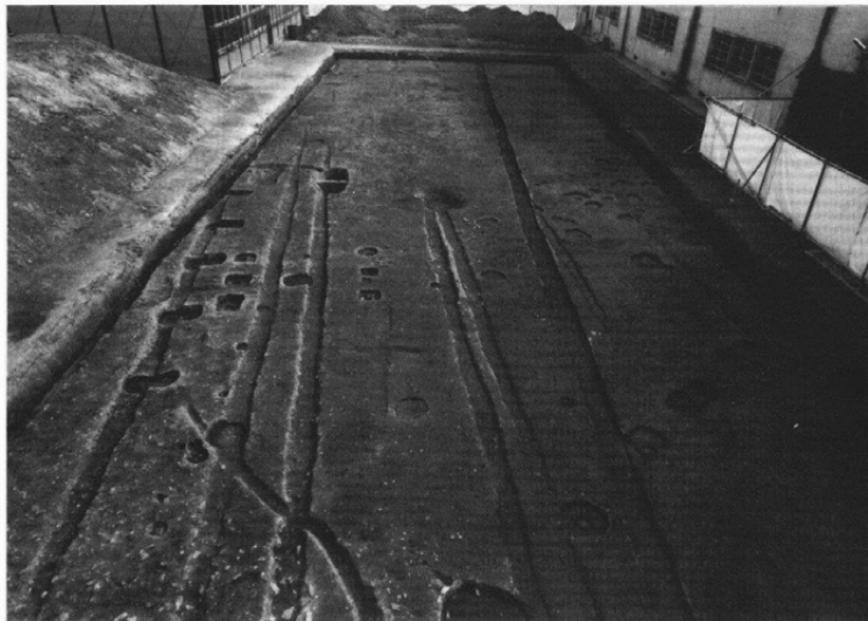
4. 建物SB04 (北から)



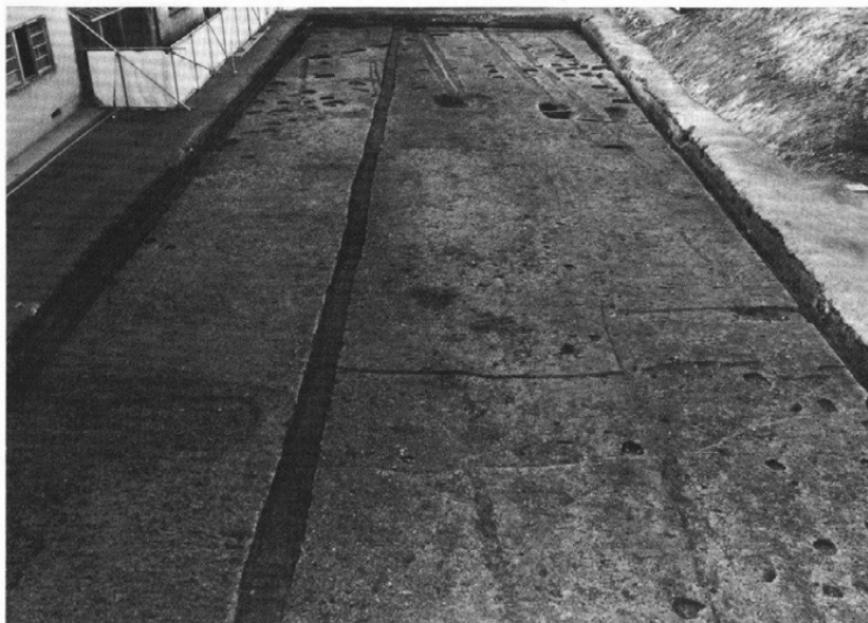
5. 溝SD06 (西南から)



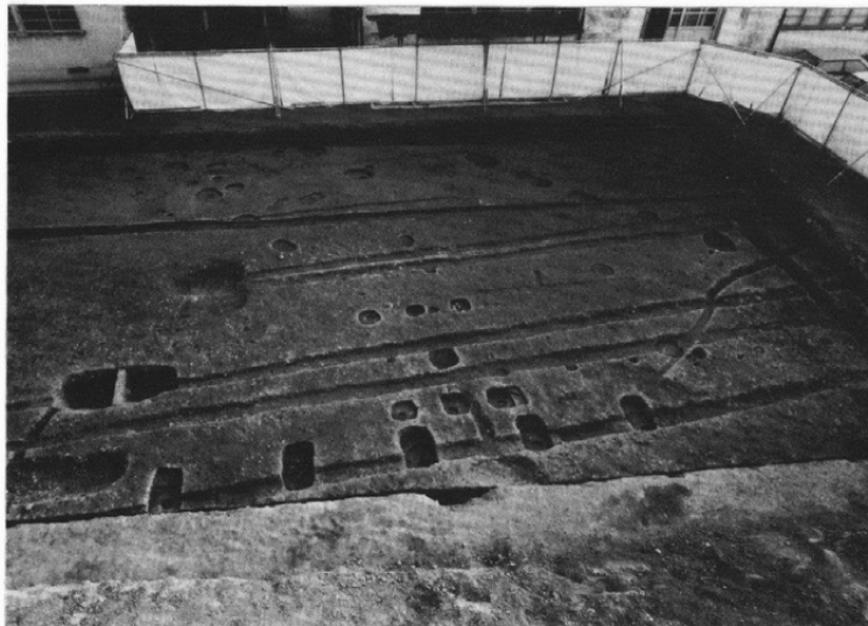
6. SD05・SD06 接続部 (北から)



1. 発掘区全景 (西から)



2. 発掘区全景 (東から)



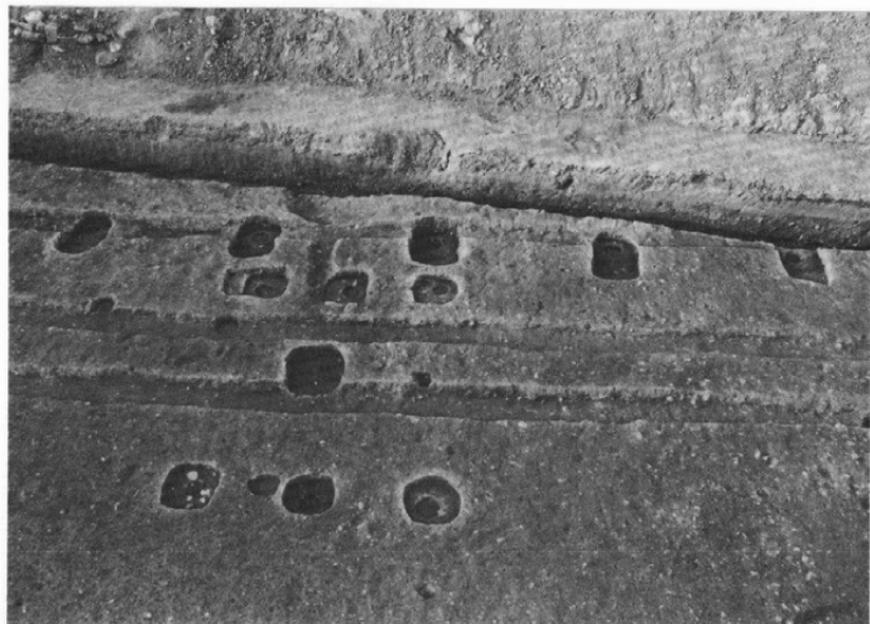
3. 発掘区(北から)



4. SA01・SB02(東から)



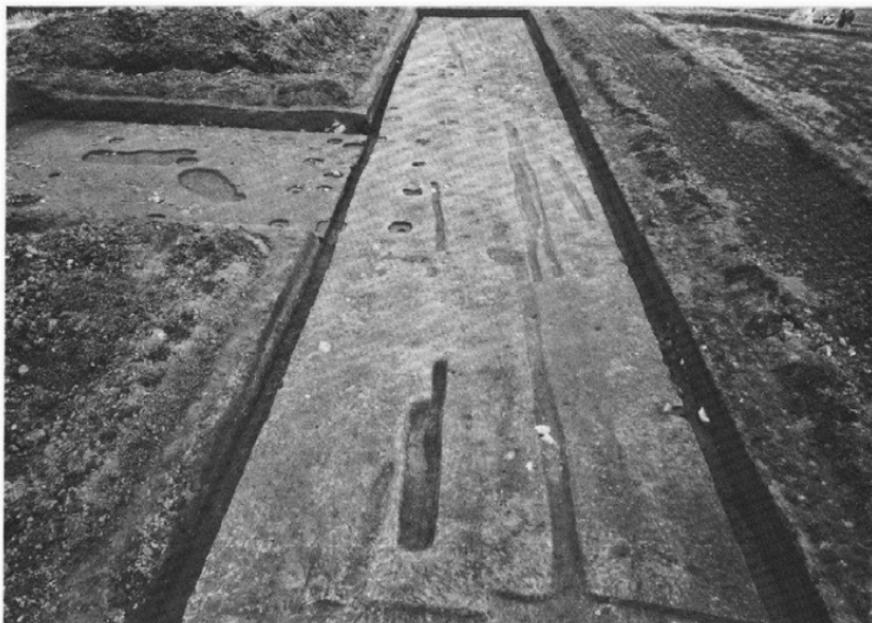
5. SB03 (北から)



6. SB04・05・06 (南から)



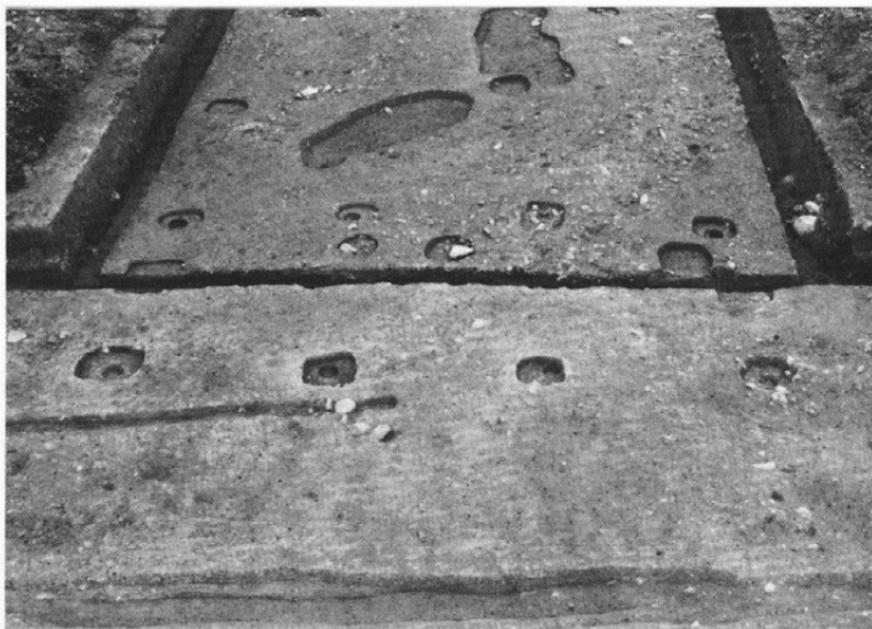
1. Aトレンチ全景 (南から)



2. Aトレンチ全景 (北から)



3. Aトレンチ拡張区 (東から)



4. SB01 (西から)



5. Bトレンチ全景 (北から)



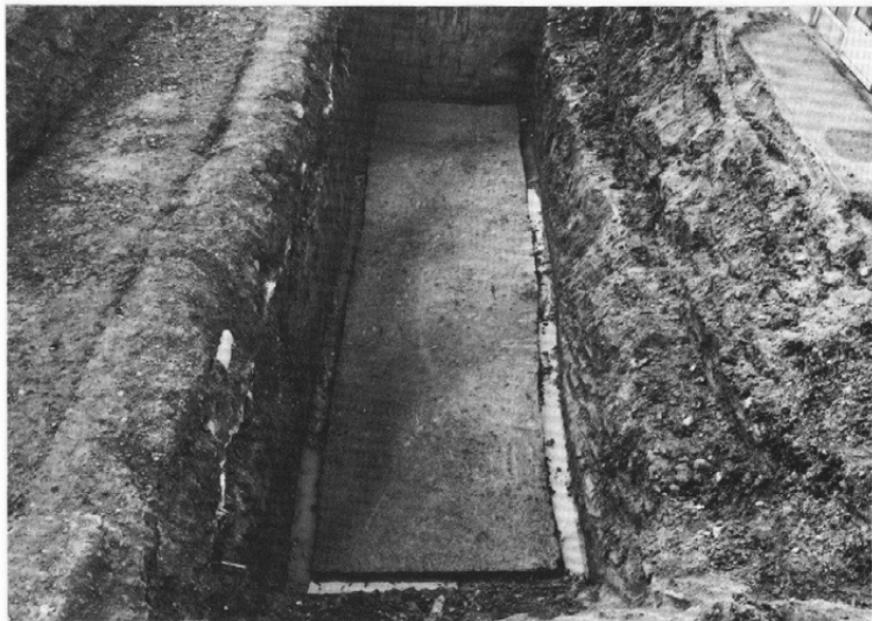
6. Bトレンチ全景 (南から)



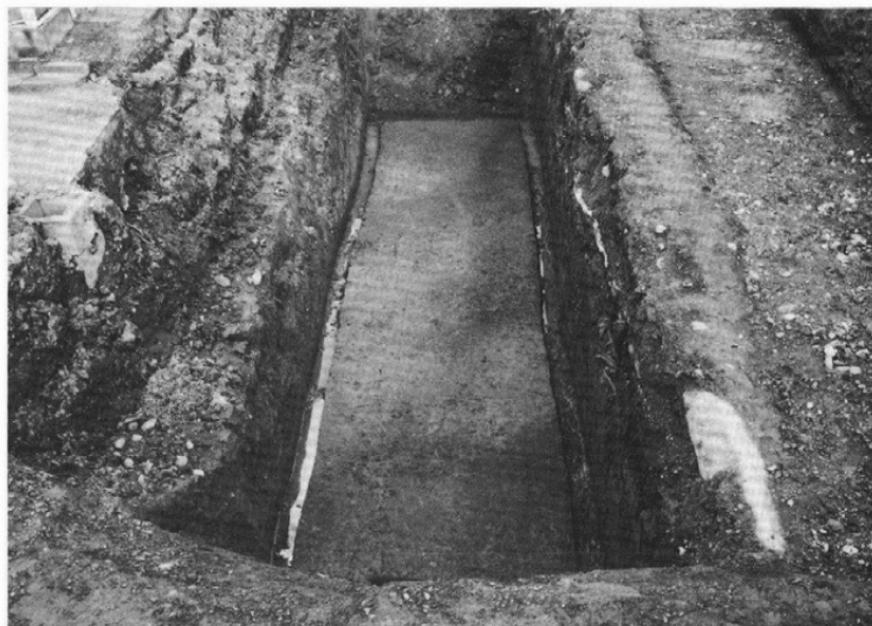
7. CTレンヂ全景(西から)



8. CTレンヂ全景(東から)



1. 発掘区全景(東から)



2. 発掘区全景(西から)



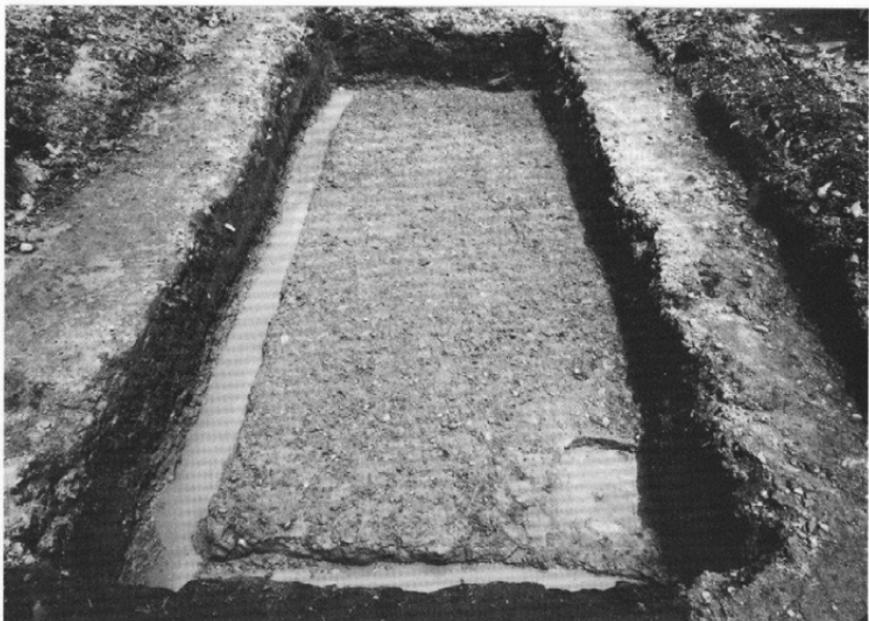
1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



1. 発掘区全景（北から）



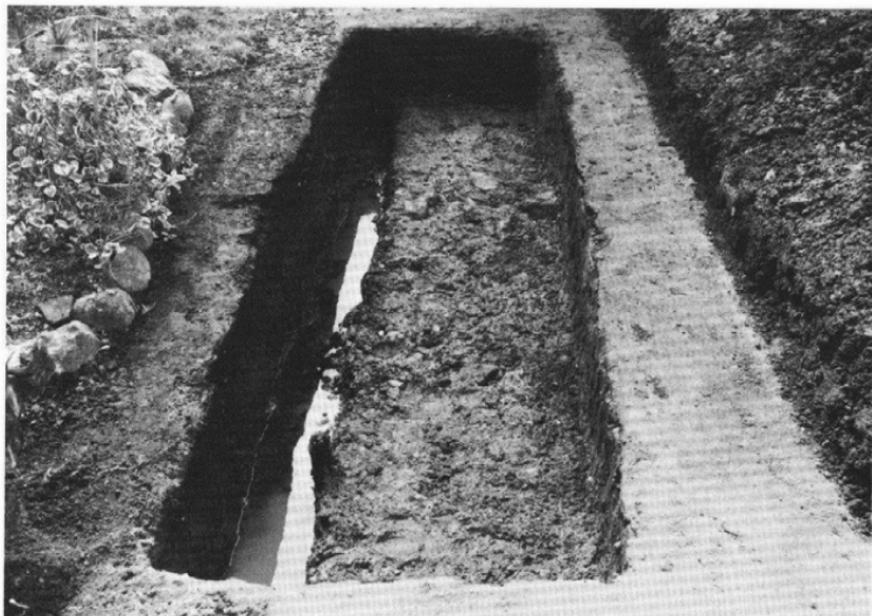
2. 発掘区全景（南から）



1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（北から）



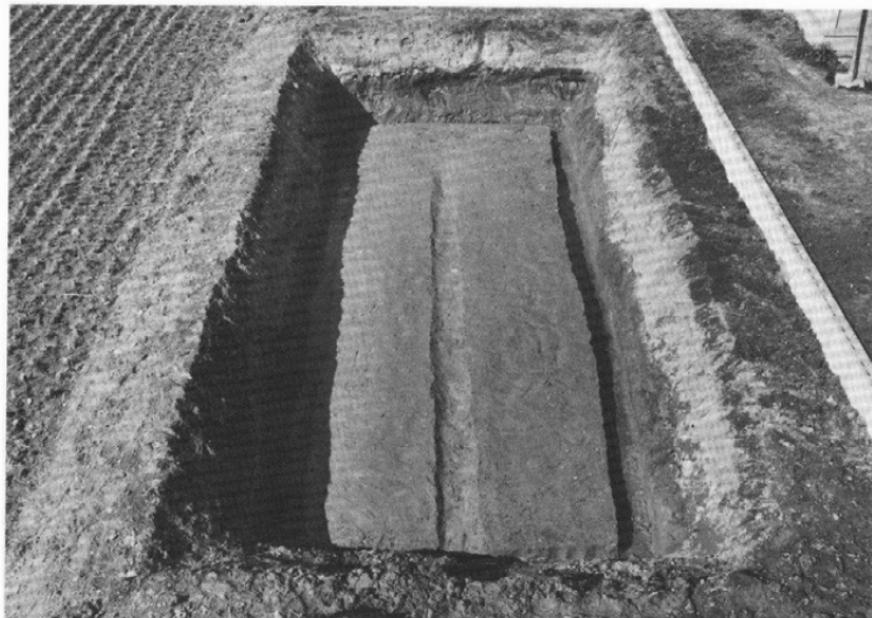
2. 発掘区全景（南から）



1. 検出遺構全景（西から）



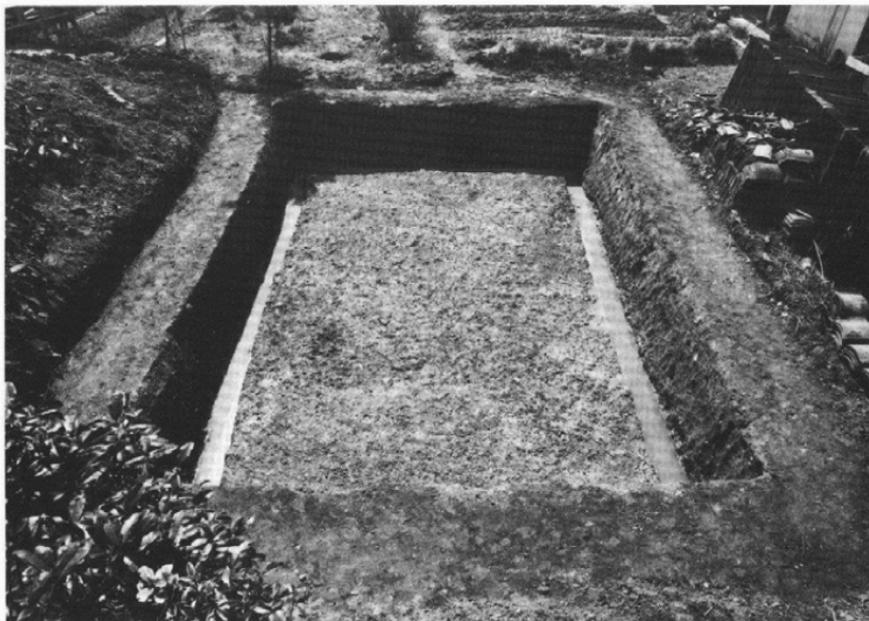
2. 検出遺構全景（北から）



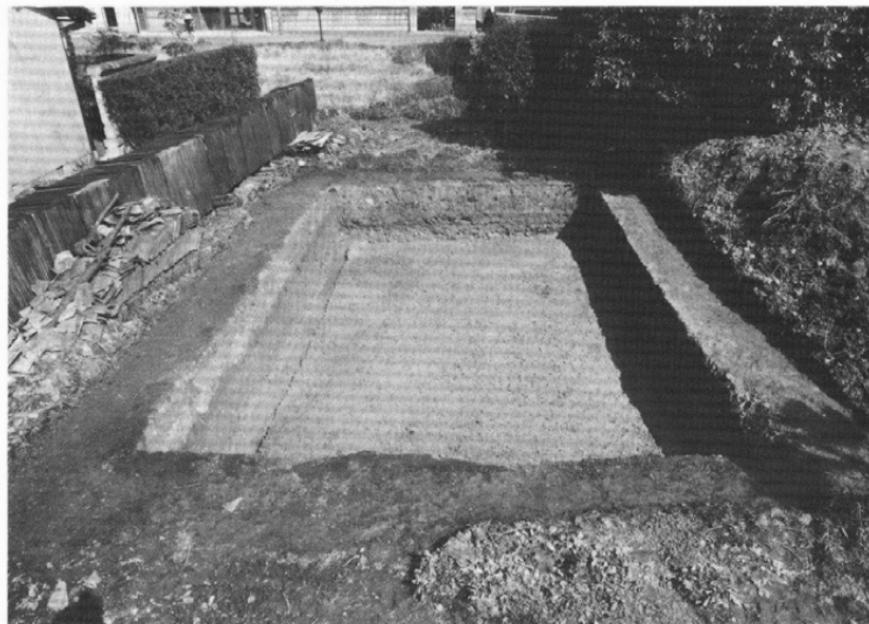
1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）

---

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和 57 年度

昭和 58 年 3 月 25 日 印刷

昭和 58 年 3 月 31 日 発行

編集 奈良市教育委員会  
発行 (奈良市二条大路南 1 丁目 1-1)

印刷 共同精版印刷株式会社  
(奈良市三条大路 2 丁目 2-6)

---

